クライン・ループ

朽葉 周

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
クライン・ループ

【Ｎコード】
Ｎ６７８３Ｙ

【作者名】
朽葉　周

【あらすじ】
感想にあったＩｎｎｏｃｅｎｔＳｗｏｒｄの過去編。
何の因果か無限螺旋に捕らわれた、極普通の一般人。
バブル前の日本に生まれ、コレヤベェと前世の知識を乱用して億万長者に。悦に浸ってると死亡。な、なにがおきたのかサッパリわからねぇ。
“彼”が無限螺旋から逃げる為、無窮の試練に挑むだけの話。
続くかは不明。執筆内容もバッサリ風味。

０１　考えすぎると鬱になる

気がついたらバブル前の日本に転生していた。
な、何を言っているか解らないと思うが、俺にも何が何だかさっぱりわからない。
転生とかチートとか、そんなチャチなモンじゃ（ｒｙ

というわけで、何故か大昔の日本に転生した。
意味が解らないが、とりあえずもてる現代知識を総動員し、後ろ暗い方法なんかも若干使って溜めた元手を使い、ソレを用いて車やらバイクやらをなんとか作り出して販売。そうして手に入れた金銭を使い、更に新製品やらなんやらの工場を建てたりと、良い感じに金持ちになれた。

嘗ての貧乏人の俺が、今生では真逆、若くしてこんな金持ち人生を得られるとは。

ヒャッホーとか喜んでいたら、ある日突如として空が黒い雲に覆われ、空から舞い降りた黒い機械群。
何か肉っぽいものと混ざり合ったそれの大群に飲み込まれて、住んでいた会社ごと消し飛ばされた。

２周目。

気付いたらまた生まれ変わっていた。
ただ、今回は前回と違い、前回と同一人物として転生したらしかった。
一体何事だと、事態を確かめるべく幼少の砌から新聞を読む幼児。
若干地元で有名になってしまったが、今はそんなことは如何でも良い。

そうして調べた結果、今一つコレといって手がかりになりそうな情報を得ることが出来なかった。
仕方無しに、また一般家庭からした俺だったが、そこで不意に目にしたテレビ。そこに、映っていたのだ。新興企業、渡米し一攫千金をなしえた巨人、覇道という男の名前が。

「で、デモベ！？」

まさかとは思いつつも、とりあえず英語を学び始めた。このときの俺は若干６歳。精神年齢は６０手前だったが、若い脳と年老いた精神のおかげか、効率よく英語を吸収することが出来た。
といっても日本語英語なので、実際に向うに行くまではどうなるか解らないのだが。

そうしている内に、なにやら父が米国に出張するのだという。
前回ではこんなイベントは無かったのだが――いや、その前に俺が父に株を薦めて、一攫千金を築いたからか。

父に何とか頼み込み、アメリカはアーカムへの出張に同行することに成功。

なにやらこのアーカム、覇道の手により近代急速に発展している都市なのだそうだ。
うわぁ、なんて思いつつ、とりあえずアーカム見学。今の時期がどの時期かはわからないが、少なくともある程度の情報収集は出来るだろう。

――金髪眼鏡のアイスクリン屋を発見。

づおおおおおおお！！！？？？
いや、彼女が存命と言うことは、本編より最低６年は前という事に成る。
いやいや、待て、ウェイト。落ち着け７歳児俺。
現状がどの程度進んでいるのかは知らんが、彼女がいる、という事はこの世界は無限螺旋で間違いない。

ええええええええええええ。
ナニソレ。つまり何か、俺は無限螺旋に捕らわれてしまったと、そういう事なのか！？
いや、待て俺。ストップ。だとすると、然し何故？
デモンベイン。アレはアレで、完成したお話だ。今さら外部から新キャラを追加する必要の無い、オリ主が存在したところで、トリッパーならまだしも、転生者を送り込む必要性は全くわからない。
例えばコレが件の燃える三眼の謀略であった場合はどうか。
いやいや、俺を呼び込んだところで何の利がある？　と言うか第一、物語の中の存在が、外側に存在していた俺に干渉できるのか？
では、干渉できる存在とは？　――外側の神？　アウターゴット？

いかん、ＳＡＮ値が直葬される。
落ち着け俺。びーくーる。

とりあえず、俺がすべき事は――。
父親に貰った小遣い。それを使って、アーカムの闇へと脚を進める。
7歳でコレは拙いかなぁ。

アーカムの裏。適当な本屋を巡っている中で、何とか見つけた辛うじて力を持つ魔導書。
ネクロノミコン新訳英語版。正直、魔導書としての精度は最悪に分類されるそれだが、某貧乏探偵の原型である探偵・タイタスが所有していたとされるのもこの新訳英語版だったはず。
さらっと目を通し、若干頭にクる感覚を感じつつ、それを懐に収めて日本へ。

そうして帰ってきた俺は、持てる知識を総動員して魔術の勉強を開始した。
因みに俺は元々の世界では厨二病をわずらっていたオタクさんだ。
それ故、クトゥルフ神話に関しても、それなりには知識を持っている。
誤訳だらけと評判の新訳ではあるが、それでも学研のアレよりは大分マシだ。

それからの俺は、普通の学生として日常生活を過しつつ、裏では魔術を学ぶ五流魔導師としての勉強を開始した。
近所では「あそこのボンは変なモンに傾倒している」なんて噂が立てられてしまったが、まぁ確かに変なもんだわな、魔術なんて。
とりあえず、噂が先行しすぎると畏怖の対象になりかねないので、表向きは良い人の面の皮を被る必要性が出てきた。
あー、面倒くさい。俺、基本的にはＤＱＮ寄りの駄目ニート何だけど。

そうして、２０代の俺。正確な年齢は今一覚えていない。何せ引篭もって魔導の研鑽ばっかりだったので。
現れたのは、件の巨大ロボ。今なら解る。アレ、破壊ロボだ。
然し何故あの狂人博士の作品が日本を襲うのか。アレって確か、夢幻心母から出撃してるんでなかったか？
佳く解らないまま、魔術を駆使して破壊ロボを叩き落す。といっても、俺に使える魔術なんて、現在のところは精々クトゥグアに使える炎の精霊を操るぐらいなのだが。
そうしてなんとか周囲の被害を抑えるように戦いつつ、漸く全ての破壊ロボを叩き潰したと、心の其処から一息ついたところで

「おやおや、こんな極東に、我々の破壊ロボを壊しつくせるだけの術者がいたとは。驚いた。いや実に驚いた。驚いたね！」

思わず息を呑む。振り返った先に立っていたのは、白いスーツに実を包んだ、なにやらエセ臭い老紳士が一人。
然し、魔導師としての――三流にもとどかない俺の魔導師としての感覚が告げる。
――死んだ、と。

逃げろ、でもなく、勝てない、でもない。
であった時点で、俺の死は確定したのだと。

「然し、悲しい、悲しいね。嗚呼悲しいとも。なにせキミが練り上げたであろうこの十数年は、この時点で無駄になることが確定したのだからね」

ドスッ、と何かが腹にぶつかる。視線を落せば、其処には腹を貫くぬらぬらと光る触手のような何か。

それは、スーツ姿の老紳士の左手。そこにあった人面瘤から放たれたものだった。

「ははは、然し驚いた。まさかティトゥスの故郷に、炎の精を操る魔導師がいたとは。はは、しかもこれはこれは。ネクロノミコン新訳英語版。まさか、こんなカスのような魔導書で此処まで戦ったとは。驚いた。ああ驚いたとも」

身体から力が抜けていく。
若干の魔術的強化を施した肉体ではあるが、あくまで人の範疇に入るものでしかない。
心臓近くの太い血管を傷つけられた今、俺に残された時間は残り少ない。

「――――ィ・――――――――・――――――……」
「うん、何かね？」
「――――……」
「ふ、もう喋る元気もないか。いや仕方あるまい。仕方あるまいとも。何せキミの魔導書は所詮新訳。かのマスターオブネクロノミコンのソレに対して、数段どころではなく格が堕ちる。魔人に達したわけでもなく、術衣形態をとったわけでもないのだ。ソレは仕方あるまい」
「……」

腹に刺さった触手に、ゆっくりと、気取られぬよう腕を絡ませる。
詠唱は終わらせた。何分、今の俺に扱える魔術ではない為、余計に長く詠唱がかかったが。
本来なら更に5工程ほどの詠唱を必要とするのだが、制御を捨てるのであれば、この程度の詠唱でも十分だ。

「ははは、ではそろそろお別れの時間だ。何、安心して朽ちるがいいよ、島国の魔導師」

そういって此方に向けて手の平を向けるエセ老紳士。
さて、今回最後の俺の命の掛けどころだ。三流にも届かぬ五流魔導師の最後っ屁、篤と喰らうがいい！！

「――いあ、くとぅぐあ！！」
「んなっ！？」

突如として現れる窮極の炎。それは俺の躯を触媒として表れ、突如として地上に小さな太陽を作り出す。
炎の神性として語られる旧支配者、クトゥグア。その炎は、今の俺では当然御する事もできず、俺ごと世界を燃やし尽くす。
そう、エセ老紳士ごと。

「ぬぐおおおおお、おのれ、旧支配者をもって自爆をおおお」
「――逃がさんよ、じじい」

残された全生命力を対価とした拘束術式。

「お、おのれえええええ！！！」
「あんたの、命……一つ、削った……！！」

そうして、俺の意識は灼熱の中に解けて消えた。

３周目

ああ腹立つ。あの糞ジジイ。いま漸く思い出したけど、アレってウェスパシアヌスだよな？アンチクロスの上位一角。Ｃ計画の巫女製造担当。
忘れない内にその情報をメモしつつ、あの後のことを考える。
捨て身のクトゥグァ召喚をかましてやったが、多分あいつ生きてるんだろうなぁ。
何せあいつ、自分の命含めて、三つの人面瘤とあわせて４つの命をもってるんだから。どこの１２の試練だ、ってんだ。

とりあえず、今週は最初から魔導の研鑽に取り組もうと思う。
ちくせう、折角あそこまで魔導を磨いたというのに、最初からやり直しだ。

６歳、父親の出張に付き合って、前回と同じく魔導書を入手。帰国して早々に訓練を始めたのですが、どうにも何か、魔術の習得効率が早い。いや、前回の経験と言うのも有るのだろうが、ソレにしては妙に魔術の運用効率も佳くなっているような……？
まさか、ループによる魂の変質？　でもあれは、あくまで白の王と黒の王に適用される物じゃ――ああそうか、前提として「ループを

繰り返している」白の王と黒の王のため、なのか。つまり、イレギュラーでループしている俺にも適用されてしまっている、と？
んな馬鹿な。妄想も大概にしておきなさいと。

とりあえず魔術の修練を開始しつつ、今回は錬金術の分野にも手を出してみた。
何分、単純に魔術の修練だけでは成果として形に表れにくいのだ。
その点、何等かの魔法薬の精製などに転用できる錬金術は、割と応用が効く。
おかげで今回は、魔術趣味の変人扱いながら、いざと成ったら頼りに成る魔術師扱いだ。いいけどさ。

さて、今回の周回では、とりあえずもう少し魔術師としての階位を上げる事に専念する。
まぁ、俺の技能が引継ぎされるかどうか、と言う問題は有るものの、実際前回よりも習得効率が上がっているのは事実。腕は磨いておいて、損は無いだろう。

４周目。

気付いたら、近所の魔術師さんとして名を上げた俺は、最終的にダゴンに踏み潰されて死にました。

はぁ。なんだろうね、もう。ダゴンってなによ、ダゴンて。いや、もしかしたらその番のほうかもしれないが。海産物に踏み潰されて死亡て。はぁ。

然し、前回の事実で理解した。要するに、魔術師では駄目なのだ。魔導師ではないと。

魔術を極めるのが俺の目的なのではない。魔術を用いて戦う道を逝くもの。魔導師でなければ。

１０歳。例の如く魔導書を入手したおれは、こっそり地味に旅に出ることにした。勿論両親には黙って。

最初に訪れたのは、日本の地下某所、九頭龍を崇拝するという邪神崇拝教。

如何見ても深き者共という外見、インスマウス面というやつだ。

魔術的にはフサッグァを辛うじて扱える程度という低い階位の俺には、とてもではないが連中を駆逐しせしめる事なんて無理だ。

なので、とりあえず洞窟の出入り口を封鎖して、入り口から大量の煙でいぶしてやる事にした。

戦場で最も恐ろしいのは炎ではなく、立ちこめる煙なのだ。

とは、誰の言葉であったか。

暫くして洞窟の中に入ると、見事にインスマウス面は全滅していた。

術衣形態なんてとれないが、魔術により自分を含めた狭い領域を異界とすることで煙の害を無効化し、煙に満ちた洞窟の中を鍛造したバルザイの偃月刀片手に進む。石柱でできた円陣を叩き壊しながら進むと、その中で不意に小さな魔力を感じた。

何だろうかと身構えながら進むと、其処にあったのは一匹のインスマウス面と、その腕に抱かれた魔導書らしきものが一冊。
感じる魔力は、辛うじて新訳を上回るか、といった程度のもの。とりあえず拝借し、最後洞窟のそこ等中にハッパを仕掛けて退散した。

この魔導書を見るに、やはり連中はクトゥルーの信者で間違いない様子だ。問答無用で叩き潰したが、うん。
とりあえずクトゥルーに関する知識――といっても日本語訳で意味不明になっていたが――の水神祭祀書から知識を得た後、それを焼却処分する。
普通の炎では燃え辛かろうが、クトゥグアの眷属の炎を使えば、ある程度の物までは燃やすことが出来るのだ。

そうして、取り敢えずの日本国内魔導珍道中を繰り返す。
魔術師としてはある程度の階位に達していたであろう俺だが、どうにも魔導師としての階位は素人そのものだった様だ。
辛うじて生き残る事はできたものの、何だかんだでボロボロに成ってしまった。

ふと、なんで自分はこんなマゾい事してるんだろうか、と思う。
なるほど、他にすることが無いからか。
俺はあくまで一般人。この世界に訪れたからといって、無限に近い世界をループするかもしれない中で、そうそう同じ事ばかり繰り返していれば、間違いなく俺は磨耗する。
実際、まだ4度しかループしていないというのに、既に俺の心は磨耗している。これは、洒落にならない。

低い階位ながら、ボチボチ戦える程度の力を手に入れて、漸く故郷

の土地に帰ってきた。
ら、なにやら空の雲色が突然怪しくなってきた。
生臭い水の臭い。――これは。
そうして現れた破壊ロボの群。
なるほど、今周はここまでか。

５周目。

新訳の入手まではパターンなのだと判断していたのだが、どうやらソレは早計というものだったらしい。日本でも手に入ったのだ。魔導書が。
父親がアメリカに行くまで暇だと判断していた俺は、普段自らの記憶にプロテクトを掛ける事にしていた。
一定以上の危険が自らに訪れたと判断しない限り、一定条件を満たすまでは自らの記憶にプロテクトが掛かる、と言う代物だ。
流石に４０年近く魔導師をしていれば、魔導書無しでも多少の魔術は使える。

そうして、近所の餓鬼と戯れる中、ある日訪れた近所の洋館。
いかにも何か出そうな雰囲気のその館。聞けば、第二次世界大戦中にドイツとの物輸を行っていた家なのだとか。
当主は存命であるものの、此処は本家ではなく分宅で、普段は建物

の外側の庭は開放されているのだそうだ。
で、当然の如くその洋館に忍び込んだ俺達は、その中である一室を発見した。
何をしても開く事の無い、硬く閉ざされた扉。ソレを見た瞬間、俺の中に設けられたプロテクトが弾けとんだ。
なんじゃこりゃ、と。
凄まじいまでの魔術的防御。いや、防御と言うよりは封印か。
中と外を別の世界と定義する魔術的結界。よくもまぁこの日本で此処まで魔術的な仕掛けを施せたこと。
驚きつつ、その日はガキ共と一時帰宅。その日の晩、再び屋敷に潜入したのだ。

そうして訪れた屋敷の中。なんとかプロテクトを解除して侵入した屋敷の中。
そこは驚いた事に、一種の異界となっていた。
修められた書籍と書籍。それだけではなく、半紙に綴られた手稿の様なものもあれば、中にはただ重ねられた羊皮紙のようなもの、パピルスのようなものまでが修められていた。

当時の此処の主は、オカルト趣味にでも傾倒していたのか、などと考えていたら、ふと目に付いたソレ。
慌ててその場から距離をとり、改めてその背表紙に目を向ける。
黒い皮の装丁に、鉄の留め金。
辛うじてドイツ語だとわかるソレ。放つ気配は、新訳英語版と比べるのも馬鹿馬鹿しくなるソレ。
とてもではないが、今の俺には扱えない。そう判断して、その冊子は開く事すらせずに棚に収めなおした。

そうして、新たに蔵書を調べようとして再び身を引く。
書籍、戯曲「黄衣の王」。何でこんなモノまで此処に。
内心で心臓が痛くなりつつも、とりあえず部屋の中に用意された机に座り、持ち込んだ大学ノートを使ってその内容を模写する。
ドイツ語らしきもので訳されているのだが、幸い俺はドイツ語なんぞ読めやしない。そのおかげか、若干頭に外道の知識が流れ込んで来はしたものの、精神汚染は休息を取れば何とかなる程度の物で済んだ。
第一章まで写し終え、魔導書から放たれる誘惑を断ち切り、書籍を棚に仕舞いなおす。
何せアレ、二章まで目を通してしまうと、なにやら悲惨な末路をたどる事になるらしい。
魔導書、怖いね。

一息ついて、漸く俺にも扱えそうな魔導書を発見する事ができた。
ラテン語版ネクロノミコンである。

いやいやいやいや。なんで此処にあるよ！？
ラテン語版ネクロノミコンといえば、ミスカトニックの秘密図書館の目玉商品――商品ではないな。まぁ、ミスカトニックの秘密図書館に蔵書されている中でも、1～2を争って力を持つとされる魔導書だ。
よりにもよって、なんで日本の、それもこんな古びれた洋館に封印――といえば聞こえは良いが、要は放置されてるの？
これ、外道すらも欲し求めるほどには幅広く知識を与える優秀な魔導書なんだけど？？？

このラテン語版、俺では辛うじて読めるが、階位的には長時間読み続ければかなり危険、とされる程度には力を持っている。

危険度としてはまぁまぁなのだが、他の魔導書に比べればいきなり寝首を掻くような真似はまずしない――とおもう。魔導書なんぞ、ソレこそ意志を持たない限りはただの外道の知識なのだから。

とりあえず手に入れたソレを鞄に仕舞いこみ、洋館の秘密図書室を後にする。

部屋の外から厳重に再封印を施し、万が一にも偶然で開く事の無い様に。

……とりあえず、今周は、このラテン語版を元に、一週ぶりに研鑽かな。

破壊ロボ多数撃破。

ダゴン（？）一体撃破。然し番らしきもう一体に敗北。

０１　考えすぎると鬱になる（後書き）

終盤、デモンベインに軽く踏み潰され続けて、更に神獣形態で十把一絡げと蹴散らされるダゴンとハイドラ。
でも冷静に考えて欲しい。鬼械神も召喚できない二流以下の魔術師に、アレは対処不可能だろうｊｋ。

02　五流魔導師旅をする

「力を与えよ／力を与えよ／力を与えよ！！」

三度呪文を繰り返し、右手に生み出すのはバルザイの偃月刀。
但し俺のソレはデフォルトの物に比べると若干シャープなデザインに変化し、何処か日本刀を彷彿とさせるものになっている。

生み出した刃を用いて、こちらに向かって飛び寄る腐乱死体を叩き斬る。

全く以って度し難い。
此処は元々某魔術結社の秘密の祭壇であった場所であり、霊的にも中々優れた立地条件に建設された意志の神殿だ。
が、現在のこの土地は、黒い瘴気に完全に汚染され、まともな人間ならば立ち入った瞬間に魔物に変貌するという凄まじいまでの呪術的汚染地域と化していた。

「うーっぷす」

そうして、今回の俺の仕事は、この汚染地域の浄化と、中々に俺に似合わない仕事であった。

４６周目。

俺って才能無いのだろうな。いまだに機神召喚が扱えないとか。
現在俺がメインに扱うのは、ネクロノミコンラテン語版。嘗てコレを発見して以降、コレを使って修練を開始した俺は、それなりに魔術師としての階位を上げ、魔導師としての錬度をも徐々に高めていた。
だというのに、未だに旧支配者の一体すら制御できない。

えっと、一回のループが２０年と考えて、魔導師としてまともに修練できるのが１０年弱。
確かループ回数が４３だった筈だから、単純に考えて４３０年は修練している事に成る筈。
……いやまて。一周毎に鍛錬した肉体はリセットされるわけだから、マイナス補正を――あー、×０．６くらいかな。と、２５８……。

二世紀半かけても一向に機神召喚が扱えず、それどころか旧支配者一柱の制御が一杯一杯の俺……。
思わずガックリ膝を突きそうになる。が、まぁある程度は戦えるようになってきた。

此処暫くのループ、日本の外、主にユーラシア寄りを旅するように成ったのだが、どうにもアジア系の怪異というのは恐ろしいね。
物理的な怪物として姿を現すのではなく、なぞの現象として姿を現す怪異。
精神的に攻撃してくるものが多く、おかげで現在の俺は内界に関しては並み居る魔導師のそれを圧倒している自信がある。
といっても内界の制御は基礎の基礎。自慢できるような事でもないのが情け無い。

まぁ、おかげでそこらの魔導書に精神がやられるような、駆け出しの魔導師レベルは卒業できたと思うのだが。

現在戦うゾンビっぽいもの。
この汚染された聖地がもつ力そのものが具象化した存在。つまりコイツラは、土地そのもののオブジェクトなのだ。
この黒い聖地が破壊されでもしない限り、無限に沸き続ける、と。

一番正しい対処は、この場所を封鎖して、然る準備を終えた後に核で吹き飛ばす、と言うものだ。
が、残念ながらそんなことこんな場所で行うと、色々な生態系が酷い事になる。
山のうえの方にあるこの場所だ。下手すると気候にすら干渉しかねない。

そこで、俺ないし流れの魔導師の出番と成る。
まぁ、実際山の山頂でゾンビが量産されつつある。何とかする一番簡単な手段は、無差別爆撃だし。
村人が此方に依頼してくるのも、それはそれで当然かなー、と。

適当にゾンビを蹴散らしつつ、漸く祭壇らしき場所にたどり着く。
祭壇というのは神殿の中心部。最も力の集まるパワースポットだ。
見れば――成程成程。山から噴出する霊的エネルギーを、瘴気が全て喰らい、自らの力にしているのだろう。
魔導師は瘴気――邪悪すら自ら従えてナンボらしいが、あそこまで邪悪でしかないものに俺は興味を持てない。

とりあえず、地形破壊は出来ればやりたくないので瘴気に向けてクトゥグアの炎を放つ。
うーん、一応焼き跳ばす事はできるのだが、どうも根が深いらしい。

やはりある程度――この神殿くらいは吹き飛ばさねばならんか。

「ヴーアの無敵の印において――」

精神（ココロ）はクールに、魂（ソウル）はヒートに。

魂を滾らせ生み出す魔力――励起。

ネクロノミコンラテン語版――喚起。

術式選択――超攻性防御結界。

空中に鍛造される無数のバルザイの偃月刀。

「霊験あらたかなる刃よ」

飛び出したバルザイの偃月刀は、ガリガリと音と火花を立てながら、無垢な神殿の白床に文様を刻み込んでいく。

例えばコレが、デモンベインなる人造の鬼械神のもつ必滅呪法、レムリアインパクトとかならば、最初から効果範囲を指定する術式が存在する。

しかし、今現在俺の最も攻撃力のある術といえば、間違いなくクトゥグアの炎の使役。

クトゥグアの使役は威力こそ高いが、そもそも其処には選択的排除なんていうものは最初から考慮されていない。

そこで、予めクトゥグアの炎の効果範囲を指定する術式を床に刻み込み、余計な破壊を防ごう、と言うのだ。

コレ、実践の中で編み出した必殺技。

初見の相手で、相手が攻撃的だった場合、割合高確率ではめ込む事が出来る炎熱昇華呪法だ。

まぁ、トラップ系のコンボ技であるため、使える場面は限定されてしまうのだが。

対象がこういったオブジェクト系ならば、この術はこの上なく効果的となる。

――ヴ――ヴヴヴ……

「良し良し」

術式が刻めた事を確認して、とっととその場から撤退する事にする。この時代、まだモーターバイクっていう物が生まれてないんだよなぁ。いや、確か西博士が独自にバイクっぽいものを開発していたはずだけど――まぁ、今此処にあるかと言われれば、無い。

ある程度距離を離れたところで、ついに最後の術式。クトゥグア召喚を行う。

但しこの召喚は遠隔召喚となる。今回の範囲指定結界には、ある程度までの距離からの遠隔召喚を補助するターゲットとしての機能が組み込まれている。

何処までも精密な魔術を。これこそ日本系魔術師として目指す場所ではないだろうか。

「フォマルハウトより来たれ、イア、クトゥグア！！」

途端、地上に出現した小さな太陽。いや、それは太陽すらも焼き尽す狂暴な穿光。

と、そのクトゥグアの炎は、一瞬の輝きの後、急速に一点に向かって収束し、即座に空間から消滅する。

――うむ、上手く行ったようだ。

クトゥグアが瘴気を焼き尽したその瞬間、あの術式は起動する。即座にクトゥグアの炎を拘束し、それ以上の暴虐を許すことなく、炎を丸ごと圧縮／虚無へと放逐したのだ。

まぁ、要するに魔術的にデモンベインのレムリアインパクトを再現しただけなのだが。

あぁ、エネルギー的な問題は、場所が解決してくれた。何せ地脈を纏め上げる為の聖域で祭殿だ。エネルギーラインは御誂え向けに用意されていたのだから、コレで失敗していては魔導師としての信用問題に関わる。

この程度こなせずして、魔導師は名乗れないだろう。

「ふぃー、なんとかなったか」

山頂を丸く刳り貫いたようなクレーターを眺めて、思わず安堵の吐息を漏らす。

まぁ、下手をすれば山が丸ごと焼滅、なんて事態もありえたのだ。それに比べれば、山頂がちょびっと無くなったくらい、如何という事は無いだろう。

この世の中には、人間にとって邪悪な種族というだけで、島丸ごと核で吹っ飛ばすような人だって居るんだし。

「ふむ、見事な魔術だ」

ビクゥッ！　と、思い切りビビッた。

何事かと背後を振り返れば、其処には逞しい髭と、傍に幼女をはべらせたグラサン老人が一人。

――って、えええええええ！！？？

「キミは、アレか。何処かの結社の魔導師かね」

「い、いえ。ただのモグリですけど？」

言いつつ、自然な動作で臨戦態勢にはいる。
何せ相手は高名なホラーハンター。一応俺も邪神の悪意に敵対する側として立ってはいるが、それでも完全に無邪気かといえばそうでもない。
長く生きれば生きるほど、俺は人としての罪を重ねる。命としての業なんて、その数十倍は重ねているのだ。

「ふむ、成程。――なぁキミ」
「は、はい？」
「もしキミがよければ、だが、正式に魔術を学んで見る気はないかね？」

と、そのグラ髭の老人はそんなことをのたまった。
彼こそ、後に長く恩師と仰ぐ事になる、ミスカトニック最強の一角たる魔導師。
ラバン・シュリュズベリー氏だった。

と言うわけで、何故かラバン・シュリュズベリー博士の紹介を受け、５０周目手前にして漸くミスカトニック大学陰秘学科への伝手を手に入れることが出来ました。
とりあえず今回の俺は、コレ幸いとミスカトニックに入学し、主に座学を中心に学ぶ事にしました。
というのも、今現在の俺の魔導というのが、完全に自己流というのが大きな問題となっていたのだ。
いや、魔導というのは結局術者の魂こそが全てと言うものなのだが、だからといって独覚（仏教用語で、簡単に言うと独りよがりの賢人）になってしまっては意味が無い。
と言うわけで、今回は基礎から学びなおしたのだ。

――然し、シュリュズベリー先生の実体験を元とした対ＣＣＤ談が一番面白かったのは――はて。

さて、今回の周での成果は、他にもある。
改めてアーカムに住む事となったおかげで、一見では解らないアーカムの文明レベルと言うものが佳く理解できた。
いわば此処は、地方の田舎都市、といったところか。
唯一大きなミスカトニック大学以外は、覇道財閥を除くとこれといって大きな建物は無い。
コレが何を意味するのか、というと、此処がループのかなり序盤なのではないか、という事だ。
今本編に関わって、邪神に気取られるわけにも行かないのでかなり遠巻きな観察になってしまったのだが、多分この予想は間違っていない筈。

というのも、このアーカムと言うところは本来ドがつく田舎の港町なのだ。
それがこの世界では、覇道財閥の拠点となることで大都市へとループごとに少しずつ成長していく。
これは、嘗ての大十字九郎が覇道鋼造として、かすかに記憶に残る覇道の偉業を真似、さらに大きな事業を起こすことで少しずつアーカムを何時かのアーカムへと成長させていく、という事象からきている。
つまり、ループが進めば進むほどこの都市は大きくなる。では都市が幼いという事は、ループが若い、という事に成る。

今回、アーカムに住んでいたおかげか、夢幻心母の姿を見ることが出来た。
いままではその余波（量産型破壊ロボとダゴンとか）だけで死んで

たからなぁ。
まぁ、いいさ。

で、今回はアーカムへの被害を抑えることを第一目標として、地味に粛々と活動していました。
具体的に言うと、簡単な魔術制御用の術式を刻み込んだ対物ライフル、Ｍ８２を使い、クトゥグアの大玉を破壊ロボに叩き込んだり、崩落したデブリを砕いたり。

――いや、まぁ待て。俺だっておかしいというのは別っている。
未だに部分的には蒸気式がメインなこの時代、よりにもよってバレットかよ、という突っ込みは俺にだって十二分に別ってる。
ただな、佳く考えて欲しい。有るんだぞ？　原子力空母だとか核弾頭だとか。それに此処はニ■ルさんの介入している世界だ。彼女の介入によってプロメテウスの炎は既に人の手の中。文明レベルも偏って進歩しているらしく、コレも軍部のテストタイプの中から一品を頂戴したものなのだとか。

――うーん、少し調子に乗りすぎたかな。
なんだか周囲を覆う破壊ロボの数が増えてきているような。

残弾は――うぁ、これは詰んだかも、なんて覚悟を決めて、最後っ屁をかます準備を始めようとしたところ。

――――――斬っ！！

不意に近付く破壊ロボが細切れになった。
何事かと首をめぐらせると、其処には白いセイギノミカタの姿があって。

『ミスカトニックの魔術師か。此処はもういい、早くシェルターに！！』
「あ、アイサー！！」
折角得たチャンスなのだ。コレを最大現に利用せずに何が魔導師かと、大慌てで地下のシェルターに。
そうして第一次攻撃は何とか凌げたのだが、次、第二次攻撃。
アイオーンを失った大十字九郎が、未完成のデモンベインとアイオーンを二個一で召喚したデモンベイン・アイオーンを使い、カリグラを撃破。
続いて仇討ちに攻撃してきた糞ガキもといクラウディウス。アンチクロスとの正面衝突なんてとんでもないと、何処か安全な場所は無いものかと覇道の地下通路を彷徨っていると、何故か正面に見えたその人物。
上半身全裸で、四本腕を生やしたブシドー。
「あ、アンチクロスゥ！？」
「む――御主、ミスカトニックの魔導師か」
げっ、と思わず声を漏らす。アンチクロスの襲撃から逃げていた筈なのに、なんでアンチクロスと正面衝突するのか。
しかもクラウディウスの襲撃から逃げていたら、ティトゥスとご対面！？
後々考えると、この時上半身全裸ということは、既にウィンフィールド氏を斬った後、と言うことだったのだろう。
という事は、このときのティトゥス、大分消耗していた筈なのだ。
「く、あそこの連中は全て時計等に引篭もっていると聞いたが――成程、少しは骨の有りそうな輩も居た、と言うことか」

言いつつ、四本の刀を構えるティトゥス。
ソレに対して、俺は思わずＭ８２を投げ捨て、バルザイの偃月刀を鍛造していた。
近接戦闘特化型のアンチクロスに、近接戦闘を挑む。そのなんと愚かな事か、後から考えると首をつりたくなる。

「――ふ、では抗って見せろ魔術師。今の私は手加減が利かん」
「――舐めるなよ逆十字。人を捨てたその身に、人の強さを思い出させてやる」

そうして斬り込んだ対ティトゥス戦。結果は――案の定。
何とか一太刀入れることには成功したのだが、刀４本を叩き込まれれば流石の俺も生き延びる事は出来ず。

「――く、為らばそれも良し。地獄まで同道願う」
「ぬ、これは固定結界！？　貴様真逆初めからこれを――！？」

範囲指定結界の内側で召喚したクトゥグア。流石に意識が朦朧としている所為で、ティトゥスの固定は今一つだったが、何とか範囲結界とクトゥグア召喚は成立させた。焼滅は無理でも、手傷を与えられたとは思うのだが――。

５９周目。

シュリュズベリー先生の実体験談というのは、実際に過去に行った討伐の話だ。
という事は、逆に考えるとシュリュズベリー先生は高確率でその場所を訪れる。であれば、予めその場に先回りしていれば、シュリュズベリー先生に出会うことも不可能ではない、と言うことだ。

まぁ、まいかい同じ場所を繰り返すのも芸が無いので、フアハ＝ハチ族だったり邪神の落とし子だったり、場所は毎回変更しているのだが。

で、ミスカトニックに通うようになってからどれ程の年月がたったか。
基礎の習得はほぼ完璧。むしろ応用こそに力を入れる時期が来ている。
そう感じて、そろそろミスカトニックから一時離脱するべきかな、などと考えるようになっていた。

あーあ、大十字九郎との直接面識、結局ミスカトニックに数十年も通って結局出来なかったし。
いや、偶にシュリュズベリー先生の講義で顔を合わせることもあったんだけどさ。
所詮、実習で顔を見る学徒、と言う関係だし。
さて、次は如何しようか。

クラウディウスに辛勝。
大十字九郎の旅立ちの後、得たセラエノ断章を読み込むも、クラウディウス戦の傷が祟り３０代にて死亡。

０３　オリジナル破壊ロボは漢の浪漫

「ひゃーははは、どうであるか我輩のスーパーウェスト無敵ロボ２８壕ＣＲ～シント、再生～は！！我輩科学の使途であるが、我輩の望む科学を実現するには周囲の基礎技術が追いつかない。ああ、天才は常に孤独、孤独は寒い、寒ければ肌と肌で暖めあおうぜって山男はイヤー！！　我輩ノンケであるが故にしりを狙うその目はらめらめよってん？　ゴゴゴゴゴゴ？　何だアレは、白い――壁です。ナ、ナダレダー！！　そう叫んだ隊員Ａ、なだれに飲み込まれた彼の遺品は唯一、その彼の声を記録したビデオカメラが見つかったのみであった……」

「ドクター、本筋に」

「おぉうそうである、要するに、我輩錬金術に手を出して、無敵ロボを更に強化したのである。こうなってしまったからには貴様等のロボット、デモンベインとかいうのにも最早敵ではないのであ～るっ！！」

言いつつ撃ち放つドクターの無敵ロボから放たれる数十の砲弾。地味に錬金術で鍛えられ、魔術刻印が刻まれたあの弾丸。あの弾丸は線状痕により回転する事で、その回転自体を儀式と見立て、周囲のマナを巻き込みながら飛来するという、ドクターのドリルのオマージュ的な弾丸となっている。

但しこの弾丸、魔導理論を使う上にかなり高コストである為、使いどころが難しい上に俺が居なければ製造すら出来ないという代物だ。ドクターに内緒でこっそりと生産してみたのだが、どうやらかなり有効な様子だ。

砲弾を喰らい、盛大に爆炎をあげるアイオーン。ふふふ、やっぱり俺、錬金術のほうが好きだなぁ。

というか、ロボとかメカが好きなのだ。
エリート魔術師大十字九郎の操るアイオーン。流石に戦闘の素人である大十字九郎には、いきなりデウスマキナで戦えといってもそりゃ戸惑うだろう。
と、思っていたら僅か2戦目にしていきなり霊燃機関全力稼動させて体当たりかました。
あんな魂の消耗の激しい術式、よく使う気になったもんだ。――いや、案外アル・アジフが見かねて勝手に使ったのかな？　うへぇ、使用者の寿命を勝手に削る魔導書……恐ろしい。いや、使わなければあの時点でお陀仏してたかもだけどさ。

１０４週目

「で、ドクター。如何だった？」
「うぬぅ。あのデウスマキナであったか。やはり強靭。やはり強大。しかし、しかしである。目標が高ければ高い程、我輩やる気がムンムン出るのであ～る！　早速修理に入ったスーパーウェスト無敵ロボ２８号も新たな改造を施している最中であるし、次は、次こそはあの憎っくきペド野郎、大十字九郎を我輩のこの手で――」
長くなりそうだったので意識を博士から逸らす。
現在の俺は、ドクターに弟子入りし、アーカムでの破壊活動に勤しむ日々を送っている。
というのも、ドクターの脳みそは狂人のそれだが、然しその技術は

間違いなく一級品。最初に深く関わる原作キャラがドクターだというのは色々悲しくなってくるが（シュリュズベリー博士はあくまで教師と生徒の関係）、それでも彼の知識は素晴らしいものがある。特にあのドラム缶。マジパネェ。現在アメリカの主力ミサイルやらＭＢＴの主砲の直撃を喰らい、それでも平然としているあの化物。

冷静に考えて欲しい。普通、６０ｍ級のロボットを、誰が個人で製造出来る？

当に化物。まさに科学の怪物。大天才ドクターウェストは伊達ではない、と言うことか。

「うーん、俺も頑張らんとね」

呟きながら、ウェスト式高度情報処理用演算端末４３号『できるんですか』――要するにパソコンのキーボードを弄りながら、そんなことを呟いた。

トイ・リアニメーター。コイツの汎用性は、ちょっと洒落にならないレベルで高性能だ。

とりあえず一機コイツを作ってしまえば、後は勝手に自分達で自分を量産して、凄まじい速度で作業を開始する。

俺もドクターの下で働き出して結構立つが、多分最も汎用性の高い作品はコレなんじゃないだろうか。

ただ、現状でこいつの名前はトイ・リアニメーターではなく、ただのウェスト式滑空方自動作業機械、という名前らしいいが。

はてされ、これがどんな経緯を辿ってトイ・リアニメーターと成るのか。

当に深遠なテーマと言うやつだ。

「ふんふんふーん」

「おや、陰気な貴様にしては珍しく機嫌が良さそうであるな？」

ふと、通りかかったドクターにそんなことを言われる。

まぁ、機嫌がいいのは事実なのでにやりと笑いながら肯定する。

「考えていた設計図に、一通り目途が付いたからな」

「ほほぅ、貴様の言っていた対デウスマキナ用破壊ロボ、と言うやつか」

ドクターの開発した破壊ロボ。それは、大元を辿ればシュリュズベリー博士のアンブロジウスであり、万能背嚢であり、自動ステージであった。

其処には、彼の作品の延長と言う属性はあっても、そもそもとして対デウスマキナとしての性能は鑑みられていない。

であるならば、最初から対デウスマキナを考えて製造された破壊ロボを作ったとしたら。どうだ。

そう考えた末に製造したのが、この機体だ。

正方形に見えて、地味に台形になっている四角い本体に、対魔術弾頭を搭載した大型レールガンを一門、小型無軌道レールガンを四門装備。さらに４本生えた腕には、其々ドリルとパイルバンカーを２機ずつ装備させた。

他にも万能投射砲やら万能マジックハンドやら色々装備しているのだが、まぁ実戦ではそう使うまい。

右側面にはスポンサー「ブラックロッジ」

左側面には技術提携「世紀の大・天・才　Ｄｒ．ウェスト」

そして背部には「ＰＡＤ－０１」の文字がそれぞれ刻まれている。

プロトタイプド・アンチ・デウスマキナ
まぁ、パッと見は正直ダンボールなのだが。スポンサーとかでかでかと書いてるし。

「まぁ、とりあえず。これ、完成し次第使ってみてもいいですかね？」
「ふむ、まぁ貴様の開発であるし、好きに使うがよかろう」
うん、さすが博士。話がわかる。

で、対鬼械神用破壊ロボ、通称ダンボールで出撃してみた。

「は、破壊ロボ！？　ってことはまたあの■■■■か！！」
「うぬぅ、意味も無く唐突に登場するとは流石■■■■。突拍子もない」

うーわー、なんだかドクターと勘違いされてる。
まぁいい。折角なので勘違いをそのままに、適当に暴れまわってみる事にした。
といっても、なるべく人的被害を抑えるように、市外で盛大に武力アピールをして、ある程度住民が避難を終えたタイミングで市街地に突撃。
うーん、このあたりの区画は大分古くなってきているし、潰しておけば都市計画の一環とか言って覇道が勝手に改造するだろうな。うん。

万能投射砲からの投射で爆撃を行い、古い区画を徹底的に破壊。ついでに裏路地も叩き潰しておく。
ああいう古臭くて薄暗いところには、怪異とか悪人とかが沸きやすいのだ。

他にも字祷子反応が高いところを優先的に叩き潰していると、その内何処からとも無く件の聖句が響き渡ってきた。

「永劫（アイオーン）！
時の歯車　断罪（さばき）の刃
久遠の果てより来たる虚無
永劫（アイオーン）！
汝より逃れ得るものなく
汝が触れしものは死すらも死せん！！」

そうして目の前に顕現するアイオーン。
ふむ、矢張りデモンベインに造詣が似ているなぁ。
デモンベインが先なのか、それともアイオーンが先なのか。うーん、コレもまた深遠な命題だ。
いや、線自体はデモンベインの流用って話だけど。世界観的な意味で。

「さーて、覚悟はいいかウェスト！」
「油断するなよ九郎。彼奴の機体は何時ものドラム缶ではない。彼奴は■■■■だがその技術は本物だ。努々油断するでないぞ！！」
「おうよっ！！」

ガチョガチョガチョン！　と音を立てて爆走してくるアイオーン。
ふーむ、デモンベインに比べるとなんとも足が速いな。やはり完全な字祷子体である為に、モノ自体が物理法則を歪めてるのか。

ふむ、成程。基礎スペックはアイオーンが上、ね。

成程成程。これでは尚更、ドクターが大十字に勝つのは無理だろ。

というわけで、とりあえず現れたアイオーンに向けて、コレでもかとレールガンをお見舞いしてやった。

「そんな物今さら効くんガッ！？」

「な、何事だっ！？」

ふふふ、途惑っている途惑っている。

このレールガン、弾頭自体に破魔術式が刻まれている。弾頭自体、幾つかのパーツとして製造し、立体魔法陣を組み込んで製造されたものだ。これも投射時に起こる回転を儀式と見立て、周囲の魔力を引き込み、字祷子構成に大きなダメージを与える事ができるのだ。

慌てたアイオーンは古き印を盾に、片手で“魔術師の杖”を召喚しようとしているが――甘い！

頭部に装着されている大型レールガン。最初から充填しっぱなしのソレを、即座にアイオーンに向けて撃ち放つ。

と、弾頭はまるで紙を破るかの様に容易くエルダーサインを引き裂き、アイオーンの片腕を派手に？いで魅せた。

フゥーハハハハハ！！！　どうだ！！　見たか！！　これこそ対魔術用徹甲レールガン！！

コレでもかと言うほどに対魔貫通能力を高め、デウスマキナですら貫く大型レールガン！！

命中精度は中型のそれに劣るものの、威力はまさに必殺！　夢幻心母だろうが撃ち落してくれる！！

「ぐ、バルザイの偃月刀！！」

さすがに此方の鍛造は素早い。即座に此方に詰め寄るアイオーンは、片手に持ったその偃月刀を此方の頭上から振りかぶり――

――ふんっ！！

「久遠の虚無へ――なにっ！？」

ガツン、と音を立てて弾かれる偃月刀。

それは、二本の細長い杭。パイルだ。

超磁力により加速された槌でパイルを叩く事により打ち出されるパイル・バンカー。

射出するパイル自体には貫通術式、それを覆う投射体には防御術式が刻まれている。

「まさかこやつ、魔導理論を！？」

ガパン、と音を立てて機体の背中が開く。

其処から覗くのは大型のファン。ぐるぐると廻るプロペラには、矢張り術式が刻印されていて――。

「周囲の魔力がアレに引き寄せられている！？」

「――そうか！　彼奴め、回転による魔力収集儀式！？　魔術儀式を機械に代用させておるのか！？」

そう、その通り。

ただこのシステム、欠点として怪異を呼び込みやすい、と言うものがある。

魔力だけ選択して吸引してくれればいいのだが、そう都合よくも行

かない。この辺りは俺の魔術の腕が上がる頃にでも――。

「ち、拙いぞ九郎！！　あのまま放置すれば、彼奴の一撃は間違いなくアイオーンすら貫く！！」

「その前に叩く！！」

近寄るアイオーンに向けてレールガンを乱射。中型のそれは徐々にアイオーンの装甲を削る。

同時に此方も後退し、少しずつ距離を離していく。なに、確かに近接戦闘もできるが、此方には大型レールガンが存在する。そこまでする義理もない。

「く、彼奴め、本当にあの■■■■か！？」

「何時もに比べて戦い方が巧い、というか、冷静すぎる」

そう、現在の大十字九郎は、ミスカトニックのエリート。つまり頭でっかちな魔術師であり、とてもではないが魔導師とよべるようなものではない。

それはあくまで知識による魔術行使の賜物。魔術師としての階位は確かに高い。然し、戦士としての能力はとても語れるレベルに無い。

間合いを操り、此方のペースで戦う。最充填を終えた大型レールガンを、再びアイオーンに向けて発射。

アイオーンはそれをステップで回避するが、その結果アーカムの都市に盛大に溝が出来てしまった。

「チクショウ、避ける事も出来ねーぞ！！」

「ぬぐぅ！！　あのガイ■チめえええ！！！」

――あー、ドクター、ゴメン。

内心でドクターに色々擦り付ける事を謝罪しつつ、自らの名を語る心算は一切沸かない。
まぁ、適当適当と呟きながら、適当にアイオーンを相手取るのだった。

一回戦戦績
パイル直撃によりアイオーン中破。システムの不良部分を発見。一時撤退により引き分け。
二回戦戦績。
敵搭乗機変更。デモンベインとの敵対。デモンベインの完成度――８０％程度と確認。
アトランティスストライクによる一撃――大型レールガン大破。
デモンベイン脚部にパイルを撃ち込むも、“魔導師の杖”によるクトゥグアの炎により大破。

最終的にドクターがアンチクロスを離脱。同道するも、破壊ロボの大群にタコ殴りにされ、脱出し損ね死亡。

03　オリジナル破壊ロボは漢の浪漫（後書き）

ばっさりー

０４　そうだ、魔導書を作ろう。（前書き）

カリン誕生回。

０４　そうだ、魔導書を作ろう。

あかん。磨耗する。
ループが３００回を越えた辺りで、そろそろ限界が近いと感じ始めた。
さすがに、人間を止めるでもなく６０００年近く生き死にを続けていると、精神が。
その癖魔導師としては何故か二流どまり。未だに機神召喚もうまく行かない。
これは、アレか。消滅するかも。

長く生き過ぎた所為か、どうにもココロが動かない。
何を見ても、何処かで見たことがあるように感じる。
何を見ても、何処かであった事のように感じる。
何に対しても心が動かない。

その事を拙いと感じつつも、どこか諦めている自分が居る。

ただ、俺が一番いやなのは、既に諦めだしている自分が居る事。それこそが最も唾棄すべき事態なのだ。

ナイアルラトホテップの言葉を鑑みるに、多分こんな段階はまだまだ序盤に過ぎないはずだ。
こんな所で砕けるわけには行かない。こんな所で死んでしまう心算

は、欠片も無いのだ。

考えた結果、記憶を移す事にしようと思う。
ただ、単に記録を残すだけでは意味が無い。それはあくまでこの世界に属するオブジェクトになってしまう。
では、何等かの記憶を、魂に付随するオブジェクトとして認識させ、俺の転生に同道できるように仕組まねば成らない。

然しそんな代物は早々手に入るまい。魂に同道する外部容量？　賢者の石でもあるまいし、そんな事が出来る代物は――――あ。

待てよ。
この無限螺旋、記憶を保持したまま次のループに移動できるのは、ナイアルラトホテップと、マスターテリオンとナコト写本ペア、大十字九郎とアル・アジフペア。
この五名のみだ。
ナイアルラトホテップは神で考慮から除外。テリオンとナコト写本もあちら側として除外。

では、大十字九郎とアル・アジフ。
この二者を見る。

――そうだ。魔導書だ。
外道の知識の集大成であるそれ。
不老にいたる知識もあれば、虚数を渡すほどの演算能力をも持ちえ、かつマスターと魂のレベルにおいて契約を結ぶ。

これだ、と思った。

然し、普通の魔導書では駄目だ。

より強い魔力を持ち、より俺と深い縁を持つ魔導書でなければ。

６６６周目。

なんとも因果な数字だが、今回の目的は、俺専用の魔導書を生み出すことだ。

現在、俺と最も縁の深い魔導書と言うと、あの洋館から得られるネクロノミコンラテン語版だ。
何せ、新訳英語版から入って、次に手に取ったのがあのラテン語版だ。あれと相性がいいというよりは、俺が相性よくなったのだ。

という事で、新たに書き出す魔導書は、ネクロノミコンラテン語版を下敷きにすることと成った。
まぁ、ある意味では安定の選択だろう。

さて、現在の俺の知識は、そこいらの魔導書のソレに比べると、途轍もなく深くなってしまっている。それこそ、ナコト写本であろうと徹夜で熟読でもしない限り狂えないほどに。
此処まで汚染されてしまうと、早々魔導書による汚染を恐れる必要もないのだが、とりあえず初心に帰って心を落ち着けながら魔導書たちを手に取る。

現在手元にある高位の魔導書は、
ネクロノミコンラテン語版、

エイボンの書、
無名祭祀書（黒の書）、
あとエルトダウン・シャーズなんて代物があったのには度肝抜かされた。まぁ、どうも「エルトダウン・シャーズ」自体ではなく、原典の模写を冊子に纏めただけのようだが。

知識だけならば、
クラウディウスのセラエノ断章、
ウェスパシアヌスが入手する前のルルイエ異本
あとミスカトニック秘密図書館の書籍の大体。

コレだけの知識が有れば、割といい魔導書が書けるのではないだろうか。
己の正気と狂気と血と魂と全てを籠めて。

最初に、富士の樹海に足を踏み入れる。
此処はいい。霊験あらたかな霊樹が多く、呪具の触媒と成りそうな死体も大量に転がっている。
ダウジングに導かれるまま霊樹を伐採し、使えそうな者を根こそぎ拾う。拾ったものは、とりあえずで使っているネクロノミコンラテン語版によって亜空間に格納する。
遺体は――さすがに勘弁して欲しかったので、見つけ次第線香を焚いて先に進んだ。

で、手に入れた樹木を製紙して、製本のために一通り必要なものをそろえる。
勿論此処にも一通り細工をしておく。

表紙の背にインクで呪術的な刻印なんかも仕込んでおく。
因みにインクにも細工をしてあり、俺の血液を精製した霊薬を混ぜ込んである。

ふふふ、錬金術を駆使して作り上げたこの紙と表紙。
あとは俺の知識の持てる限りを此処に記せばいいのだ。
さて、始めますか。

3日目。死掛ける。
魔導書の魔力恐るべし。

6日目。死掛ける。
学習しないな俺は。

9日目。また死掛ける。
だから徹夜をすれば死ぬと。

12日目。
また死掛けた。ちょっとダメージがでかいので、筆をおかざるを得

ない。

１５日目
記述再開。

２０日目
旧神の記述、クトゥグア、ハスターなんかの記述は、ネクロノミコンよりもセラエノ断章のほうが詳しかった。改稿。

３０日目。
少し休憩を挟む。

４５日目。
エイボンの書は良い。外なる神の知識が詳しい。
演算能力も凄く、虚数展開カタパルトやら空間転移の術式に優れている。
これは記述せざるを得ない。

５６日目。
やばい。暫く家の外に出ていない。

一ヶ月ほど外に出て、身体を鍛え休めることにする。

８６日目
記述再開。

１００日目
キリがいいのでメモ。

１２１日目
拙い、まだ完成してないのに魔導書として成立しつつある。既に記述が魔力を孕みだした。
未完成のこの状態で字祷子に触れさせるのは拙い。何かしらの隔離空間を作らねば。

１２３日目
借り受けたアパートに呪術的封印を施し、そこを自らの執筆拠点とした。
なにやら呪われていたので、お払いしておいた。格安物件である。

１４３日目
なんだか知らないが、建物の管理人が大丈夫ですか～、今なら違約金は安めで済ませますよ～とか言ってきた。成程、幽霊物件で違約金をせしめる類の悪質な業者だったか。
まぁ、このまま延々居座らせて貰おうと想う。
なに、案ずるな。出る時には字祷子汚染で酷い事になっているさ。

１６２日目
気付けば筆がおかしな方向に進んでいた。
ニャル子さん、続きを読む為にも元の世界に返りたいなぁ。
少し休憩を挟む

１７０日目
執筆再開

２００日目
やばい、旧支配者の代表的な四柱の記述の完成度がおかしい。
てか、あれぇ？　俺ナイアルラトテップの記述とか何処で知識を得たっけ？？？

２２０日目

きが、くるう。

２３０日目
あかん、また休憩をいれねば。一ヶ月くらいやすむ。

２６０日目。
記述再開。

２８３日目
近所に怪異が発生した。どうもこのマンションから魔力が洩れたらしく、そこに怪異がひかれたのだろう。
慌てて結界を修復し、ついでに怪異も消し飛ばしておいた。

３００日目
知識としての記述は書き終えた。
あとは、制御の為の俺が生身で得たアドバイスを記そうと思う。
今年中には完成させたい。

３３２日目

制御の術式が半分完成。

３６０日目
制御術式が完成。疲れた。
後は製本するだけ。今年中には終われそうだ。

３６６日目
除夜の鐘にあわせて魔導書を完成させたら、その瞬間に莫大な魔力があふれ出した。
俺の作った隔離結界？　一瞬で吹き飛ばされたさ。
慌てて魔導書を宥め（？）て沈静化させた。
驚いた事に、未分化ながら魂が宿っているらしい。意志、までは行かない様子だが。
面白い現象だ。

二年目。

7日目。
面白い事が別った。このネクロノミコン再編版、どうも今現在成長期らしい。
意味が解らない？　要するにこの魔導書、生まれたての赤子のようなものなのだと思う。
主な食料は、ありとあらゆる活字。とにかく活字であれば、文学作品から新聞から果は魔導書でも、というか魔導書のように魔力を含んでいると尚いいらしい。

１０日目
驚いた。ネクロノミコンラテン語版再編が精霊化した。
あれは俺の家の書籍が全滅し、仕方が無いので洋館の書籍を与えよう、と洋館を訪れた時のことだ。
洋館に眠る魔導書。それらが突如宙を舞い、次の瞬間ラテン語番再編に飲み込まれたのだ。
驚いて呆然とする俺の目の前で、最後に黒い表紙の冊子が一枚、パクリと食われた。あれ、無名祭祀書だよな？
とか驚いていたら、光と共に字祷子が活性化し、気付いたら其処に少女がひとり。

如何したものかと悩んでいたが、捨てるわけにも行かず、寧ろ好都合と家に連れ帰る事にした。
無論、実家ではなくアパートのほうに。

１１日目
名前をせがまれた。
悩んだ結果、カリンという名前を与える事にする。
砂糖漬けとか果実酒が好きだった。

さて、とりあえず俺専用の魔導書は完成した。
しかし、現状ではまだ弱い。此処から更に完成度を高めていかなければ。少しでも俺の魂に同道できる可能性を上げるには、カリンの保有する魔力の質を向上させる必要がある。
現在のカリンが保有する魔力は、俺から供給される物と、俺が書き記した記述、取り込んだ魔導書から得たものなどが上げられる。

俺からの供給は除外するとして、俺が記した記述の魔力と言うのは、実はそう多くは無い。
魔導書と言うものは使ってナンボ、時間を経てナンボなのだ。

であれば、手っ取り早くカリンを強化する方法は一つ。
――魔導書の乱獲である。

手始めに日本を制圧。
小さな島国である日本だ。あまり多くのＣＣＤは居らず、収穫は正

直今一。
手に入る魔導書とＣＣＤ対戦回数比がおかしい。

朝鮮半島を昇り北上。
クトゥルー系の魔導書ってわりと中国で書かれていることが多い。
ルルイエ異本とか、あれも確か中国語訳があったはずだし。
まぁとりあえず、狂人の手稿含め中々の収穫だった。

中国
げろげろげー。
なんというか、いろいろな意味で汚染が酷い。
七色マーブルに濁る河の傍で、口から泡を吹いて痙攣する深き者共を見たときは、思わず手を合わせてしまった。

ロシア
やばかった。覆面をしていたから指名手配は無いと思うけど、某宗教組織と正面衝突した。
いや、確かに外道の知識を駆る＝悪魔との契約　みたいなものだけどさ。
然し凄いね、あの秘蹟って技。信仰心を集めて威力に転科するんだってさ。
聖書は精進料理みたいだったそうだ。
一応魔導書も入手。

ヨーロッパへ
シベ鉄だっ！！

ヨーロッパ
ひゃはぁぁあああ！！！　入れ食いだぜええええええ！！！！
凄まじい数の魔導書と、凄まじい数の怪異。
その悉くをカリンが喰らい、その悉くを俺が浄火していく。
何か途中、ロンドン系の魔術師とガチンコになったが、まぁ機神召喚を使うわけでもなく、あっさり倒せたので問題あるまいよ。

南ヨーロッパ
此方の方は魔術の発展は微妙みたいだ。
然し凄いのは魔導書。原住民の言葉だったり、先史文明の言葉だったりで読めるものは少ないが、それでも此処にある魔導書は知識としてよりも狂気と魔力においてはぴか一の代物が沢山得られた。
それと、最近階位が上がったのか、直感が優れてきているような気がする。
直感と言うか、心眼（偽）というか。第六感というか。
銃弾を避けるなんて真似を、真逆この俺がなしえるとは。

アメリカ東部
折角なのでアーカムに立ち寄った。
そういえばアーカムの東海岸の沖、深き者共の巣があったような――。
と、思い立ったので襲撃。精霊化したルルイエ異本って、そういやこれ原作キャラじゃネーか！？

なんて思っていたら、とめる暇も無くカリンがルルイエ異本を喰った。性的な意味じゃなくて。
うーわー、カリンの魔力が一気に膨れ上がった。もう既にキダフ・アル・アジフの魔力とか超えてるんじゃね？

アメリカ西部
時代錯誤のカウボーイめ！！　いや、時代的には間違ってないんだろうが、アーカムを見ると時代考証がおかしくなってくる。
ビヤーキーの記述が記載された手稿を所有しているらしく、ピースメーカーから誘導弾をガンガンと撃ちまくってきやがる。
己はオセロットかと思わず悪態をつきながら、クトゥグアの大玉で吹き飛ばした。
手稿を喰ったカリン曰く、中々良い味の手稿だったそうだ。

中部アメリカ
というかベネズェラとかコスタリカとか。
流石にこの辺りでは魔導書なんて無いかなー、なんて思っていたのだ。俺は。あくまでオーストラリアに渡るついでに此方を通っただけなのだ。
何か、トカゲ頭の怪物の群れと乱戦になった。

オーストラリア
オーストラリア自体には力ある魔導書は少ない。まぁ、狂人の手稿とかが無いわけでもないのだが。

ダウジングにしたがって、砂漠の真ん中の小屋に入ると、地下には狂気の図書館が――的な展開はあった。が、それは別に過去世界中の何処にでもあったし。
問題は、オーストラリア近海の海底だ。
アフム＝ザーの魔力で海底の深き者共を凍らせて、その間に連中の魔導書を頂戴した。うーん、やっぱりクトゥルー系の魔導書多いなぁ。
内容的にはもうかなり重複しているし、既に魔力以外は要らんのだけど。

ハワイ
わいはー。言葉を逆さにするなっ！　スイマセンオトウサン。
あぁ、そういえばそんなコマーシャルだった。

久々の休暇。うん、いいね。
ただ問題は、精霊化したカリン。当然の如く人型になれるのだけれども、その姿が黒髪青目の幼女だ、という点だ。
いや、いい事なんだよ。カリンが自我を以って、遊びに興味を持ってくれるのは。
ただ問題は、その幼女が俺に向かってご主人様（マスター）って呼びかけることだ。
く、くぅ。魔導師として練達するには人を捨てる必要があるというが。主にペド的な意味で。
とりあえず俺の呼称を兄と呼ぶように言い聞かせておきました。

髪の色、俺もカリンも黒髪だし、容姿的にも俺の影響か若干日系よりに成ってるし。
多分、大丈夫。ひそひそ話なんて聞こえない。
ポリさんが近付いてきて、慌てて逃げたなんて事実も無い。
美幼女が目の保養になる、なんて感じた時点で、俺も落ちているのだろう。
イヤだ！！　マスターオブネクロロリコンなんて呼ばれたくないいいいい！！！！！

末期
ティベリウス（というか妖蛆の秘密）を道連れにクトゥグアによる自爆。

０４　そうだ、魔導書を作ろう。（後書き）

ふと思ったのだが。
アル＋九郎＝九朔で紅朔（アナザーブラッド）だとすると、
アル（の子）＋九郎＝機械言語版――リトルエイダってあいつ等の姉？？　妹？？
ラテン語版はギリシャ語からの訳で、大体孫に当る。
つまり九郎は恋人の孫と子供を作ったことになるのか？　あるぇ～？？　ギリシャ神話並みに複雑な家庭環境。さすがはマスター・オブ・ネクロロリコン。一味違うなぁ。

０５　瞳を閉じて（いたらループがｋｓｋした）。（前書き）

デモベ効果恐るべし。

０５　瞳を閉じて（いたらループがｋｓｋした）。

大体１０００周目強。

漸く、やっとの思いで機神召喚にたどり着いた。
まさか２万年近く掛かるとは、流石の俺にも想像してなかった。
途中何度挫けそうに成った事か。だが、俺はついにたどり着いた！！
自分の娘に等しいカリンにニチャニチャ慰めてもらったりと色々情け無いが、それでも俺はついに至ったのだ！！
ふはははは！！　何か若干魂が変質しだしたり、素の肉体のパワーが初っ端から常人離れしていたりと、半魔化してるけど気にしない！！
魔導師として強力に成った理由が、ロリペドに走った所為のような気がしないでもないが気にしない！！
召喚といっても、術式自体がかなりアヤフヤで、まだまだ改良の余地もあるし。

さあ！　今周も魔導書食いに行くぞ～！！

１５００周目

漸く機神召喚が形になりつつある。
基本的なデザインはアイオーンなのだが、何故か俺の機体のデザインにはひらひらが多い。

ひらひらと言うか、装甲がシャープに丸みを帯びて、その内側に魔力式推進機関みたいなものが多数設置されているのだ。
うーん、いわばブラ〇ク・サレナとアー〇ヤをアイオーンに足して割ったような感じか。
あぁ、其処にクロックワークを付け足したようなデザイン。クロックワーク・ファントムな。
若干敵役臭いデザインだけど――まぁいいか。
然し現状、出力不足でシャンタクまで手が廻らない。

大体２０００周を超えた辺り。
漸く、漸くシャンタクと鬼械神を同時に扱えるようになった！！
空飛べない鬼械神とか、余りにも役に立たなさすぎてここ５００周近くは必死こいて魔力総量を高める為に只管瞑想と実戦を繰り返していた。
アンチクロスも、カリグラと糞ガキ辺りならサシでやれば勝てる程度には腕も上げた。
くくく、これで逆十字の残る面々にもある程度は挑めるはず！！

ドクターに撃破されました。

ぬ、ぬかった。火力不足とは。

制御に手一杯でその他に全く手が廻らなかったという罠。

大体３０００周目くらい。
カリンと共に過すようになってどれ程立っただろうか。
カリンに依存する事で精神の均衡を保っていたが、それでももうカナリやばい。
自らの記憶、知識、経験を整理し、必要分と必要無さそうな部分を区別し編纂しカリンに預け、自らの記憶を一度リセットする。
何、魂の変質自体は消えてなくなるわけではない。習得速度は、始まりに比べれば比較にならない程度のものにはなっているはずだ。

誰かも言っていた。其処に至る為には知識が必要で、知識があるが故に最後の一線を越えられない、と。

どうなるかは解らんが、いざとなれば俺の記憶が自動的に復活するようになっている。まぁ、大昔におれがやった自己暗示の術の強化版のようなものだ。
さて。
俺はどんな運命を辿るのやら。

不明。３万周目くらい。

カリンに呼び起こされて目覚めてみれば、どうやら今周の俺はミスカトニックの学生をやっているらしい。
うーん、今さらなんでミスカトニックに、なんて思っていたら、どうやらミスカトニックの経済学科の学生として入学したら、怪異に巻き込まれて魔導師としての教育を受ける事に成ったらしい。
王道な展開だなぁ――って、いやいやいや、何やってんのよ俺。
予め万周を超えるストックが有る俺だ。そりゃ一気にエリートになりもする。
有頂天に成っていた俺だが、どうもミスカトニックの陰秘学科でライバルと呼べる存在にめぐり合ったのだそうだ。
それが、大十字九郎。人類の正義の極地、白の王。
そんな記憶に思わず頭痛を感じていると、どうやら俺、大十字とは此処数週、高確率で仲良くなっているらしい。
というのも、どうもここ数周の俺、実家の関係で渡米し、そのままミスカトニックに定住しているのだが、同じ日本出身であり、また共に魔術を研鑽する中という事でよく付き合っていたそうだ。
なんともまぁ。

で、更にここ数周の話、どうやら俺の死亡原因は魔術的闘争というよりは、大十字を庇って格好良く死ぬ、というのが多かったらしい。
俺馬鹿じゃね？？？

４万と少し。

何故か知らないが、気付いたらウェスパシアヌスとの共同研究ルートに進んでいた。意味が解らない。
どうも魔導機械を扱えるという事で、ウェスパシアヌスに気に入られたらしい。
改造人間用の小型魔導機械の技術を共同で開発し、互いにウィンウィンの関係を結べたのだとか。
いや、いやいや。何考えてるんだか俺よ。それ、二回目の俺の仇。

でも、この周は凄かった。俺の研究していたのは、『肉体に埋め込んだ呪具を用いた挙動による略式祈祷呪術』と言うもの。物凄ーく簡単に説明すると、変身ポーズを決めると本当に変身できたり、ラ〇ダーキックに呪術的負荷を追加したり、掛け声と共に腕をクロスさせるとスペ〇ウム光線が発射できたり。いや、発射されるのはただの呪（フィンの一撃相当）だけど。
この周のブラックロッジは凄く熱かった。変身と必殺技が横行してたしなぁ。

何故か下級社員が一番多い周だった。

５万周目くらい
今回はどうやら、久々にドクターの元で開発に勤しんでいるらしか

った。
なんでもドクターのサポートではあるが、同時にドクターと喧々諤々と喧嘩する仲なのだとか。
で、あちらは魔導理論を搭載したドラム缶、此方は魔導理論を搭載したダンボール。
どちらの機体がより優秀か、キッパリはっきり優劣を決める為、ここアーカムの町のど真ん中で巨大ロボ同士の決闘が始まるのだ。

「ンフ、ンフフゲァーッヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャァァ！！！　漸く、漸くこのときが来たのである。我輩と貴様、共に科学による真実を生み出すものであるが、それゆえに相容れぬ真実を生み出すこともまたあり。この辺りで一度確りと決着をつけておきたいと努々思っていたところなのであ～る！！」
「ふん、俺の答えが、ドクターにとっての違う真実と認められている、それ自体は光栄だな」
「ふひゃひゃひゃ！！　では行くぞ我が弟子！　エェェエエエルザアアア、ゴォォォオオオウウウウウ！！！！！」
「恨みは無いけど、覚悟するロボよ！！」

言いつつ、ガッチョンガッチョンと此方に近寄ってくるドラム缶。
此方もダンボールを前に進め、両腕のパイルに魔力を充填させる。
魔力パイル。アイオーンすら破壊するこの一撃だが、残念ながらドクターの破壊ロボにはこの一撃は通用しない。
というか、直撃を許さないのだ。

「ロボォッ！！」

ガツン、と放たれたパイル。然しソレは、曲線を描くドラム缶の装甲によって方向を逸らされ、威力の大半を軽減させられてしまっていた。

「いいまだ！　スーパーウェスト式“男の浪漫”ドリルゥ！」
「ロボォ！！」

ガツン、とぶち当たるドリル。ガリガリと削られる装甲だが、然しドリルはある程度ダンボールに沈み込んだ時点で、それ以上奥に進まず、空転したまま抜く事すら出来ない、というような状態に成る。

「な、何ですとぅ！？」
「肉を切らせて骨を絶つ！！　ダンボール装甲は伊達じゃない！！」

近接状態からのパイルを放とうとして、それを万能腕の一本に阻まれる。ならばと別の腕で中型レールガンを放とうとすると、それもキャノン方をぶつけて逸らされる。

「おのれ！！」
「ろぼぉ！！」
「ぬぐっ！！」

ガパッ、と音を立てて開くドラム缶とダンボール。
その中から現れるのは無数のマジックハンド。
両機がまるで毛に覆われたかのように見えるその有様で、互いに互いのマジックハンドの邪魔をしつつ、なんとか一撃を叩き込もうとモジャモジャもがく両機。

そうこう暴れていると、不意にウウィーンという駆動音が響いてくる。

「ちょ、ドクター！」
「なぁんであるか、今わが這い途轍もなく忙しいのである。具体的

には、三日三晩必死こいて寝込ませたカレーの前に空腹の大食漢がいて、嗚呼駄目だこの子は私の血と汗の結晶、貴女なんかには渡せないは、いいやハニー、ソレこそ僕たちが求め合った愛の結晶、ああ、ハニー、ハニーと百合百合なお花畑が咲き乱れる花園を地味に盗撮しようとする輩を通報する程度には忙しいのである！！」
「わかったから、ドクター、デモンベインがくるぞ」
「なぬっ！？」

「こんの■■■■共がっ！！　俺の貴重な栄養補給の邪魔しやがってえっ！！！」
「己らに、ひっくり返されたフルコースの恨み、篤と味あわせてくれよう！！」

うわぉう。何か知らんが、変な恨みを買ってしまったようだ。

「ちょっと待てペド探偵。確かに俺は敵対しているが、■■■■扱いはやめい」
「その前にペドって呼ぶのを止めたらなぁ！！」
「えっ、でも幼女はべらせてる無職を他に何て呼べば……」
「うむ、諦めろ九郎」
「ちょ、アル手前どっちの味方なんだよ！！」
「そ、そうは言ってものう。事実昨夜とてあれほど激しく（ナイトゴーントとの訓練を）妾と一晩中ヤッて居ったではないか……」
「紛らわしい言い方やめぃ！！」

はいはいギャグワロスワロス。

「ええい、此処であったが3日目の煮込みカレーだ大十字九郎、コトコトに込んでクリームシチューにしてくれるわっ！！ってあれ、

ルーは何処にいったのであろうか」
「昨日の晩おじいちゃんがチョコと間違えて食べちゃったロボよ」
「あぁ、そりゃうっかり。テヘッ☆」
「フヒャーッハッハッハ」「ローボロボロボロボ」
「ええい喧しいぞ■■■■コンビがっ！！」
「だからペドフィリアに言われたく（略」
「嗚呼もう面倒くせぇ！！　とりあえず、ブッ倒す！！」

いいながら飛び掛ってくるデモンベイン。
断鎖術式での二段ジャンプは、こういう高速移動にとても便利なのだ。
然し、然しだ。

「エルザ、十字火砲で」
「了解ロボ」
「ちょ、なーんで我輩でなくてエルザノおおおっ！？」

近寄るデモンベインから一気に距離をとり、デモンベインとダンボール、ドラム缶の位置が二等辺三角形になるように配置して、と。

「いぃまだあっ！！　ジェーノサイドクロスファイヤアアア！！！！」
「スクウェアポイント、シュート」

ドラム缶とダンボールから放たれる対魔術式を刻印された特殊弾等。
咄嗟にエルダーサインを張るデモンベインだが、当然の如くエルダーサインを引き裂いてデモンベインを削る弾等。
然し――大昔、コレを最初に開発した頃に比べて、エルダーサインの強度が若干上がっているような――。
ふむ、大十字九郎はこの無限螺旋の中で着実に強くなっている、と

言うことか。

とりあえず、流れ弾に見せかけて、未開地域を何時もの如く吹き飛ばし、ついでにデモンベインの改良すべきポイントを狙って破壊しておく。
うーん、さすが俺。ピンポイントな威力行使は俺の最も特筆すべき点だとおもう。

で、結局どうなったかと言うと。
何処からとも無く現れたメタトロンに博士の破壊ロボが吹き飛ばされ、次いでデモンベインのレムリアインパクトでダンボールが昇華した。
ちくせう。

０５　瞳を閉じて（いたらループがｋｓｋした）。（後書き）

次回――キャラ崩壊注意。
主人公と言うより作者が迷走している。
どうしたものか……。　ｏｒｚ

０６　色々キャラ崩壊する話　（前書き）

これは、果たして本当にデモベ２次に分類していいのだろうか。

０６　色々キャラ崩壊する話

億と三千少し。

シュブ＝ニグラ傘下の魔術結社と、トカゲっぽい化物を操る魔術結社が争っていた。
どうにもトカゲ側の狙いはシュブ＝ニグラ側の保有する魔導書らしく、シュブ＝ニグラ側は撤退戦の最中、と言う様子だった。

まぁ、基本的にシュブ＝ニグラスって地属性の邪神の中ではそれほど有害というわけでもないし。
黒い豊穣の女神、と呼ばれるだけあって、奉っていれば農業の収穫率がアップしたりする。
但しその野菜を食うと若干ＳＡＮ値が下がるが。それでも美味いのだ。

如何考えてもトカゲ側が害悪。そう判断して、即座にクトゥグアの炎をトカゲに叩き込んだ。
最近になると、クトゥグアの炎もかなりの精度を持って制御できるようになってきた。
適当に暴れていると、今度はシュブ＝ニグラス傘下の側が反撃に移った。
いや、市街地で黒い子山羊の大群を嗾けるのはどうかと思う。耐性無い人間が――あーあー、窓に向かって叫び始めた。「窓に！　窓に！」って。
まぁ、シュブ＝ニグラス側はある程度良識があったのか、撤退完了と共に黒き子山羊を召還していた。

俺はと言うと、とりあえずあのトカゲ人間を殲滅して、その中央に居た魔導書を持ったアラブ系の女性を燃やしておいた。
何か不気味な魔導書を持っていたっぽいが、俺が如何こうする前にカリンが食べてしまった。
行儀も躾けるべきだろうか……？

億と三千と少しから一周
何故かシュブ＝ニグラスの教団に誘われた。
俺はフリーのホラーハンター気取りなので、お誘いは丁重にお断りしたのだが。
そしたら、何故かシュブ＝ニグラスとの親和性が友好的にまで上昇していた。いや、意味が解らない。

億と3千終盤
何か寝ていたら、魂が突然どこかに引っ張られた。
何事かと慌てると、星の海を渡って宇宙の彼方に。

「■■」

「あ、あわわ」

で、目の前に現れたのは、無限の熱量で形作られた獣。
いや、その正体は流石に理解できる。何せ俺、この存在の力は一番

よく利用させてもらっているしい。
――という事は、此処、フォマルハウトか。

「■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■」
「え、あう、はい」
「■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■」
「あ、そですか」

意訳すると、「お前、なんか知らんけどニャルラトテップの庭で暗躍しとるらしいな。シュブちゃんから聞いたえ？」「面白いやん。ウチもあのド腐れは好かんかんからなぁ」
といったところか。
いや、本当にそういうニュアンスだったんだって。

で――嗚呼もう面倒ぃ。

『いやな、今日呼んだんは、お前にちょっとサービスをやろうかな、って』
「え、ええっ！？」
『言うても、そんなでかい事は出来んよ。派手な事したらよわっちい無敵の頑固馬鹿が怒るからの』
と、炎の獣から放たれた炎が、俺の躯を覆いつくす。彼女（彼？）の炎に燃やされてしまっては、流石に致命傷になるな、と背筋を冷しつつ、然し訪れたのは予想していたような痛みではなく。
『ウチの加護や。ウチの配下は須らくアンタに力を貸す。でも、調子乗ったらあかんえ？　それと、絶対あのド腐れにきつい一撃かます事。約束やで』

言われて、理解する。これ、クトゥグアの祝福か！？
もし俺にスキル欄がアレば、間違いなく「クトゥグアの加護」って出るだろうな。効果は――炎に対する親和性ってところか？？

『ほんじゃーの』
「て、ちょ、あざーっす！！」

ベチン、と彼女（？）の尻尾に叩かれて、俺の身体はマッハどころか概念を超越した速度という意味不明な結果によって、地球のほうへ向かって叩き飛ばされたのだった。

「はっ！？」

目が冷めて、慌てて身体をチェックする。
何か、若干神性が強化されてるよ――。クトゥグアの加護、間違いなく稼動してる。
何せ、ちょっと睨んだだけで部屋の花瓶の造花が燃えたし。何処のパイロキネシストだよと。

――って、ちょ、ああっＳＡＮ値が！？　窓に！　窓に！
猛烈に脳裏に沸き上がる邪神の姿。こ、これは発狂してる！？
机に向い、ガリガリと手が紙に勝手に何かを書き記していく。ちょ、これ拙い！？
カリンは――何を暢気に俺の手稿を食ってるんだお前はっ！！！

結果、発狂して死亡。
其処から魂が安定するまで実に１０周ほど不安定な人生を過す。

億と４千周くらい。

久々にホラーハンターとして活躍していた今周。何故か再びあの感覚に襲われた。
何事かと警戒していると、今度は何か佳くわからない神性に牽引されて宇宙を進んでいた。
――これ、ビヤーキー？
まさか、とは思いつつも、覚悟だけは決めておく。

※以下『』神性
『よ』
「――どうも」

其処に居たのは、黄色いマントと派手な王冠を被った、何処かチャラい印象の成人男性の外見をした存在だった。
う、うーん、いいのかコレ？

「大体予想は付きますけど、貴方様は――」
『んー、予想付くならいいだろ？』

予想は当ってるのねー、と胃痛を感じた。

「で、御身はこの度私に何の誤用で？」
『うん、いやな、この間偶々放火魔とシュブに連絡するよう字が有

って』
「放火魔て」
『他所の住居に放火して、森一つ延焼させるヤツだぞ？』
「――御身らにしてみれば、そんな感覚なのか――」
流石に感覚のスケールが違う。ガリガリＳＡＮ値が削られてるのが解るぜ！！
『でな、二人曰く、面白い人間がいて、加護を与えてみた、って』
「あー、いやー、俺、そんなに面白いでしょうか？」
『んー、若干外れてはいるが、たかが人間があの若作りの庭で、若作りに気付かれないように潜んでいる、って状況は中々面白いとおもうけど？』
「え、まだ気づかれてないの！？」
と、思わず声を上げていた。
何せあの演出好きの邪神の事だ。俺のことはとっくにお見通しで、あえて俺を見逃しているのかと思ってた。何せ俺、基本的に大十字とテリオンの戦いには干渉しない方針だったし。
俺の方針は、合理的な被害の削減。
『んー、お前のステータスがなー』
「え、ナニソレ。ステータスなんて見れるの！？」
『んー。――あ、人間はこういうの見れないんだっけ？　んじゃ、ほら』
「え、なにその「神様では常識です」みたいな対応。って、ええっ！？」
諏訪　鋼一　属性：中立・中庸

筋力　C　（D）
耐久力　B（C＋）
魔力　A＋＋（A）
幸運　A
俊敏　B
宝具　？？？

保有スキル
・イレギュラー　EX
観測世界への堕落の印。EXにも成ると、物語の根本をも揺るがしかねない。また、物語に内在しながら『物語』のあらゆる強制干渉を受け付けない。（検閲の不可能化）
・狂気の飼い主　EX
心を犯す知識に汚染されながら、尚その狂気を飼いならす者。字祷子を扱う魔導師には必須スキル。
無限の輪廻に磨耗する魂は至玉の如く。あらゆる精神干渉から魂を守る。
・半神　C　（B）
神性を現すスキル。魂が若干神格化している。魔力、精神面に影響があり、幼い身体での全力行使は自滅の元。
汚染率としては高い神性を持つのだが、人としての自意識により神格を押さえ込んでいる。そのため寿命も人間レベル。
・魔術　A
魔術の巧みさ。無限螺旋で鍛えられたもの。大体の魔術をワンアクションで行使できる。
・対魔力　B＋＋（B）
魔力を使用した現象に対する抵抗力。半神化、および加護により向上している。
・千里眼　EX
身体的な視力のよさ。派生して透視や未来視など。二次対象に対す

る影響力を持つ放出系以外の『目』『眼』の名前を持つスキルの大半を使用可能となる。

・心眼（偽）Ａ

魔導からの派生。元々持つ野生の直感。魔導師として鍛え上げられた事で、危機察知に対しては抜群の精度を誇る。

・鑑定眼　Ｂ－－Ｎｅｗ！！（＿ｆｒｏｍ　Ｈａｓｔｕｒ）

視認対象のステータスを確認できる。

Ｂは一見で相手の名前、体力、魔力を見抜き、見て得たスキル情報などは別口での閲覧が可能。

精度は高め。技術などは実際の使用する姿を確認する事で確実な情報へと更新される。

・シュブ＝ニグラスの加護　Ａ

黒き豊穣の女神からの加護。彼女を崇拝する魔術結社を助けたことから。

地に対する親和性と、怪我や病気に対する回復力、また呪に対する抵抗力の向上、耐久力の向上。

農業をすると大体豊作かつ良質になる。ただし作物はＳＡＮ値を削る。

・クトゥグアの加護　Ａ

炎の化身の加護。シュブ＝ニグラスの紹介（？）であり、まだ憎きあんチクショウに対する嫌がらせとして。よくクトゥグアの炎を利用するがためにサービスとして得た。

クトゥグアの眷属に対する優位性、炎との親和性などを得る。

宝具

・ネクロノミコンラテン語版からの再編

ネクロノミコンラテン語版を元に、古今東西の魔導書の記述を取り込み独自改変した書物。

ネクロノミコンと言うより、内容的には寧ろナコト写本に近付いている。

黒髪青目の美幼女が化身。

「なんでサーヴァントのステータス表示式なんだ！？　って、イレギュラー？」

『そりゃ、ほら、アレだ。ゼロがアニメ化したから――って、うん、そうそう。そのイレギュラーってスキルが原因だな』

闇の皇太子が何か馬鹿な事を言っているが、その辺りはさっくり無視して、と。

そう言うメタ発言は混沌さんのキャラでしょうに。

『そのイレギュラー、要するにこの“字祷子の庭”の外側から来た存在が持ってるスキル。外側から来た存在には、俺達そう簡単には干渉できないからさ』

何せ文字通り法則が違うんだから、と闇の皇太子様。

成程。何か、あるぇ？　なんでこんな世界観ひっくり返しかねない状況になって、俺の事情として根本的ななぞが一つ解明されてるんだろう。

「あれ？　でもそれにしては俺、偶に検閲されてるというか、勝手に加筆された痕跡みたいなのを感じたんだけど」

『あぁ、そりゃお前等の世界の神じゃね？』

「はぁ！？」

『何処の神も愉快犯ばっかりだからな』

なんじゃそりゃ、と思わず言葉が零れた。――何時か、魔を絶つ剣に近づければ、その神は叩き斬る。

とりあえず、せめて、もう少し緊張感のある展開でネタバレして欲

しかったような。

『んで、お前俺の力も割と使ってるから。２柱の紹介も含めて、ほれ』

そういって魔風が俺を包み込む。

――うぁ、ステータスが追加されてるよ。しかもその影響か、若干全体のステータスが上昇してるし。俊敏が一番目立つ変化かな。

・ハスターの加護　Ａ

闇の皇太子の加護。全ての魔風は我と共に。風との親和性向上。また風属性に対する強い影響力。

更に魔力を消費する事で機動力を向上させることが出来る。

「良いんですかね？」

『いいんだとも。所詮俺達は邪神だぜ？』

「いや、自分で言うのもどうかと」

『崇拝してくれるやつにはちゃんと力を貸すし、コレはソレとは別口。俺達の娯楽の一環なんだから』

成程、と頷く。

つまり、俺に力を与える事で、どの程度あの混沌の庭の引っ掻き回せるか、という事なのだろう。

うーん、俺、それほど暴れる心算は無かったんだけどなぁ。

クトゥグアと約束した、混沌に一撃入れる、っていうのは何とか達成するつもりだけど。

『字祷子の庭に住む邪神ってのは、大概娯楽に飢えてる。俺達がお前等知的生命体にちょっかいをかけるのって、実際娯楽だし』

「ちょ、ブッチャケた！？」
『だって、考えればわかると思うんだが、俺達がお前等に力を貸して、一体何になるよ？』
「し、信仰とか」
『人類なんぞよりよっぽど信仰してくれる奉仕種族は宇宙中に居るが？　第一、信仰ってナニソレ美味しいの？』
「邪神がそのネタ使うなや！！」

い、いかん！！　ついつい突っ込みに走ってしまう！！
もうやだなにこれ。シリアスブレイクとかカリスマブレイクとか、そういうレベルの話じゃないぞ！？

『ま、そういうわけだ。俺からのサービス、有効に使えよ』

そうして目が覚めると、身体が静かに風を纏っているのを感じ取った。うへぇ、本当にアレの祝福っぽい。
何か鑑定眼スキルも実装されてるし、――って、んぎゃあああああああ！！！！？？？？

突如頭を襲うカオス。余りの痛みに発狂すら許されないそれ。そうして次に襲い掛かってきたのは、肉体の暴走。邪神を直視し、あまつさえ鑑定眼なんてスキルまで与えられてしまったのだ。
邪神を鑑定する――何その自殺行為。

「ぐ、お、おのれ邪神んんんん――」

頭の中の狂気を、頭から押し出すかのようにして、再び俺はペンを手に取る。
そうしてそのすぐ隣、ニコニコといつの間にか擬人化して待機するカリンの姿。心配して欲しいな、なんて思う俺は我侭なんだろうか。
ふぅ、と小さく息を吐く。

――さぁ、行くぞカリン。用紙の貯蔵は十分か――っ！！

・発狂して死亡。正確には食事を忘れて餓死。
半神化してるのに餓死て……。ｏｒｚ

億と４千周ちょっと。

あのセカンドインパクト（邪神という存在に対して）から数周。
邪神を生で見るという経験を人生で二度も経験したのは、そう多くは無いのではないだろうか。
まぁ、二度目と言うことも有って、数周で精神も復帰したが。

とか思っていたら、また引っ張られた。
今度は誰だよともう憂鬱としながら視線を上げると――。

「うげ」

思わず声が出た。目の前に居たそれ。タコのような緑のおどろおどろしく狂気を司った神である怪物であり旧支配者たるＣＣＣＣＣＣＣＣｃつうっつるうるうううるるるるる――――再起動。

――精神防御網再構築。

――構成完了。

「――ぶはぁ！！」

慌てて、ソレから眼を逸らす。

危な。危うくＳＡＮ値を削りきって死ぬところだった。ＳＡＮ値減少による死は周回を経て後を引くから厭なんだよなぁ。

「――眼を見ぬ失礼をお許しいただきたい。偉大なるＣよ、卑賤な人間である俺に、一体何用か」

『――シュブ＝ニグラス曰く。お前は面白い駒であるらしい』

眠たそうなニュアンスで、ぼそぼそとそんなことを言うタコの化物。と、途端強烈な潮の香りが身を包んだ。何事かと慌てるが、身に沁みる神気に、真逆と慌てて己を鑑定する。

――うわ、クトゥルーの加護て。

水及び腐食を初めとする状態異常系に対する耐性、海というフィールドにおける適性向上などなど。

ステータスも、魔力がＥＸになって幸運が――マイナス補正付いた！？

ぐ、ぐぅぅ、さすが神話のタイトルに名を馳せる邪神。祝福でマイナス補正つけやがった。

と、俺に祝福を与えたクトゥルーは、何処か満足げな、それでいて

眠そうな声で小さく頷いた。

『――金ピカには――負けんよ――――――』

金ピカって誰だ。英雄王でも居るのか、と思わず突っ込みそうに成ったが自重した。

どうせクトゥルーが敵対するって言うと、闇の皇太子だろうし。

確かあの二柱って、シュブ＝ニグラスを挟んだ三角関係なんだっけ？　くわしくしりません。

目が覚めて、何時も通り発狂。

今回はわかりやすい人型を取ってくれていなかった所為で、物凄くＳＡＮ値が削られた。

然しまだ慌てる時間じゃない。何せ俺は此処数回邪神に召されてＳＡＮ値をガリガリ削られていたのだ。

もう大分削られなれた。

「さて、カリン」

「はい。にー様」

「……それはバカンスの時だけ」

「じゃ、ダディー？」

「そりゃハヅキちゃんのだ」

「イエス、マスター」

「……あー、エセルドレイダか、リトルエイダ？」

「――最後のは普通だと思う」

「あ、うん。そだね」

あー、げふん。

「さてカリン。またＳＡＮ値直葬されかかってるのだが」
「ごはんＴｉｍｅですね！！」
「――お前、何時から腹ペコキャラに……」

思わずガックリ膝を突きたくなったが、期待に瞳を輝かせるカリンを見ると、何かもう細かい事は如何でも良くなった。

「んじゃ、いくか」
「イタダキマス」

パチン、と手を合わせるカリンを横目に、狂気の吐出しにかかるのだった。

０６　色々キャラ崩壊する話　（後書き）

学園魔砲少女戦記「くとぅ☆るふ」

主人公：弐倉　志風　Ｓｈｉｈｕ　Ｎｉｇｕｒａ
何処にでも居る普通の少女。乙女チックな主人公兼ヒロイン
豊穣を司る魔女っ子

北落　火乃　Ｈｉｎｏ　Ｋｉｔａｏｃｈｉ
志風の友達の炎の魔女っ子。気風のいい姉御肌で、何時も志風の心配をしている。
暗部「不尾魔流波宇都（フォマルハウト）」の創設メンバー。

九頭竜　海人　Ｋａｉｔｏ　Ｋｕｚｕｒｙｕ
何時も寝ているのんびり屋の少年。志風の幼馴染。最近転校してきた蓮多に志風を取られそうで警戒している。海が好き。

蓮多　空也　Ｋｕｕｙａ　Ｈａｓｕｔａ
春風と共に訪れた転校生。金髪美形で、何処かの国の王子様と噂される。
志風に興味を持ち、現在接近中。

何処のギャルゲだよ　ｏｒｚ

07　つまり、胎動とか強襲とか

もうよく解らない周目。

最近、面白い現象が発覚した。
俺は基本的に、死亡転生によるループ移動を行っていたのだが、どうもそれ以外にループ移動の方法があった様だ。

というのは、デモンベインとリベルレギスの最終決戦直前。クトゥルーを生贄にヨグ＝ソトースを召喚し、海洋上にゲートを開いたあのシーン。
あそこで、偶々ドクターの協力者をやっていた俺は、何時ものダンボールにのって覇道の艦隊を援護していた。
あまり派手な活動をしてしまうと、ニャルさんに目を付けられるので、精々ダゴンを散す程度にしか活躍しないが。
幸い俺にはクトゥルーの加護なんてものもある。直接召喚されたクトゥルーの支配力には流石に劣るが、それでも向こう側からの積極的な攻撃は嘗てに比べると大分減っている。

然しそんな中、ダゴンを散している内に、いつの間にかダンボールは周囲の艦隊から徐々に孤立していた。気付いたときには、いつの間にか石柱群のすぐ近くへと引き寄せられていた。

これは拙いと慌てて反転したところ、丁度ダンボールを門に押し込むような形でダゴンに体当たりを食らった。
慌てたのもつかの間、今度はダメージを受けた機体が盛大に暴走を始めた。

強い打撃を受けた影響か、ダンボール内部に設置された魔力コンデンサが逆流し、機体の要でもある魔力収集タービンが逆回転を始めたのだ。
タービンはつまりプロペラ。それも、ダゴンにより防護幕が壊され、むき出しになり、その上で逆回転。
つまり、タービンが、何の因果かスクリューに化けたのだ。

「にぎゃあああああああああ！！！？？？」

大慌てで機関停止を命じるも、ぶっ壊れた魔力コンデンサはジェネレーターまで巻き込んだらしく、どうも焦げ付いた回路が変な具合で接触、魔力収集用タービンと逆向きに直結してしまったらしい。
最早今回はコレまでかと早速諦めていると、機体はそのまますっと門の中へと突入してしまったのだ。

「ちょ、何処行く気ロボよ」
「知らん、あの世かもしれん。とりあえずあばよエルザ、ついでにドクター！！」

言いつつ、門の中に入りきった時点でダンボールが吹っ飛んだ。
まぁ、最早通常火力の爆発程度では死にはしないのだが。最低でも魔力を纏った攻撃でないと。

「で、なんだけど――カリン」
「Ｙｅｓ，Ｍａｓｔｅｒ　御前に」
「エセルドレーダごっこか」
「格好良かった」

マスターテリオンの走狗、愛犬などと揶揄される魔導書「ナコト写本」ことエセルドレーダ。彼女のその妄信ぶりは、同じく仕える魔

導書であるカリンにも何か感じ入るところが有ったのかもしれない。
「アル・アジフの真似はしないのか？」
「――あれは萌えキャラ失格」
あー……うん。まぁ、言ってやるな。

「じゃなくて、だな」
「話を逸らしたのはマスター」
「……機神召喚！！」

話を逸らすように術式を走らせる。あふれ出す莫大な魔力に導かれ、赤いデウスマキナがその姿を表した。

うーん。
外観（ガワ）はアイオーンを魔改造した、という感じなのに、感じる魔力は完全に別物。無名祭祀書とか下手すると流血祈祷書の影響でも受けたかな？
一番似ているのはナコト写本の気配なのだが――いや、やっぱり無名祭祀書かも。

とりあえずその赤い機体――クラースナヤととりあえず名付けたその機体に身を躍らせ、即座にシャンタクを召喚する。
別に無くても飛べるのだが、シャンタクが有ったほうが安定するので。

「然し、そういえば何度も周回を繰り返しておいて、ヨグ＝ソトースに突入するのは初めてだよな」
「Ｙｅｓ、いっつも此処に来る手前におっちんでました」

「――た、たまには生き延びただろ！」
「その場合は、世界各国で生産された破壊ロボモドキ相手に俺つえー無双してました」
「……」

デモンベインが立ち去ったその後の世界、それは、科学が台頭する魔境の時代だ。
ブラックロッジが残した、ドクターウェストの作品、破壊ロボ。各国はそれらを回収し、独自に開発を進めた。その結果訪れたのが、破壊ロボモドキが戦いあい、更には破壊ロボ対邪神なんていう場面がゴロゴロ転がる魔境な世界だった。

ま、まぁいいさ。
召喚後即座に発動させた隠匿術式。直接戦闘よりも忍んで逃げる事に定評の有る俺だ。例えこの門の内側にあろうと、逃げおおせる事に関しては外なる邪神すら欺いてみせる！！

と、そんなことを内心で考えつつ、如何したものかと機体を飛ばす。何せ此処からの脱出は基本的に不可能。更に言うと、出口も何処にあるのやら解らない。
うーん、如何しようか。

「ダウジングを利用してみては？」
「おぉ、それだ」

カリンの提案を即座に承認。続いてバルザイの偃月刀を召喚する。
このバルザイの偃月刀って凄いよね。浮かべて回転させると、ダウジングの針にもなるんだよコイツ。
浮かべたダウジングの針に従って幾何学模様の回廊を進むと、いつの間にか何処かの宇宙空間へと降りていた。

ふむ、どうやら太陽系の内側ではある様子なのだけれども――。
「星の配置が予測と正しければ、火星と地球の間と判断」
「うげ」
火星と地球の間。確か、アイオーンのシャンタクを使っても５０時間近く掛かる距離だったとか。
その半分――２５時間としても、とてもではないが俺の集中力が持たない。
「ハスターの記述を使えば？」
「あ、そっか」
そうか、そうだ。シャンタクの記述に頼らずとも、より早いハスターの記述を持ってたんだっけ。いっつも軽い移動補助か牽制にしか使わないから若干忘れてた。
ハスターの記述を使う前に、懐から取り出したソレ。
黄金色に輝き、試験管の中にたゆたう液体。
コレこそ魔術的ドラッグ。術者の魔力を一時的にブーストさせる秘薬。
黄金の蜂蜜酒！！
あっま。
そうして何とかたどり着いた地球。魔力的消耗は許容量的にはまだまだ余裕なのだが、何分途轍もなく眠い。疲れると眠くなる。これ

は真理だ。
で、とりあえず地上に降りて、何処か宿を取りたいなー、などと考えていたら。
視線の先で、争う二つの影。いや、此処宇宙空間だし～、などと思っていたら、地上に落ちていくそれら二つの影。

「――なぁ」
「Ｙｅｓ、デモンベインとリベルレギスです」
「――聞く前に答えるなよぅ」
「つーん」

べ、ベタだが可愛いじゃねーか。じゃなくて。
うーん、この光景があるという事は、つまりあれは魔を断ち切れなかった魔を絶つ剣？
という事は、この後デモンベインはアリゾナへ、マスターテリオンはどこぞに消える、と？

つまり、何か。
死以外の方法で、ループした、と。

――ふーむ。

「カリン、全力で隠密を。全魔力をそれにまわせ」
「Ｙｅｓ，マスター」

何も聞かずに此方にあわせてくれるカリン。デウスマキナすら消して、マギウススタイルで宇宙を漂う。
アレがあるという事は、近くに――うわ、マジでいた！！
燃える三眼。這い寄る混沌。

心底楽しそうに嘲笑するそれ。如何見てもどっか逝ってるねーちゃんです。関わりたくありません。
幸い、これが最終週と言うわけでも無さそうだ。こっそりとその場を離れ、地味に背中から地球へ向けて降下開始した。
なに、幸い此方にはクトゥグアの加護がある。
更にその上からマギウス・スタイルを身に纏い、身の回りの防備はまさに完璧。

「うーし、じゃ、行こうか」
「何処に行きます？」
「うーん、折角原作の数十年前に来たんだし、折角だから何か面白いものでも探しに行こうか」
なんて、そんなことを嘯きながら、俺達は日本へ向けて降下を開始したのだった。

正直な話、ナイアルラトホテップが「幾星霜」って数えたのは、数字を読むのが面倒だったからじゃないかなと思う周目。

面白い。実に面白い。
完全攻略したと思って積んでおいたゲームを、気分転換にやったら

実は更に裏ルートが存在していたとかそういう様な気分だ。
まさか、過去にジャンプして攻略を進めるなんてルートが存在していたとは。
思わず日本経済に背後から介入して、日本と言う国の国力を急成長させてしまった。
覇道財閥がナンボの物かと言わんばかりの成長。まぁ、覇道とはあまり競合しない所為で、あまり本編には関わらないのだが。

で、俺の話。
経済に介入した後で気づいたのだが、下手したらコレ、俺が生まれる下地まで変革しかねないか、と。
うわ、やべぇと焦ったときには既に遅く、仕方が無いので開き直って更に改革を進めてみた。

で、それから数十年。俺も年をとった。
驚いたことと言うかご都合主義と言うか、この世界で俺が生活するのは中々に疲れる。
多分基盤が違うものを使っているからだろうと考えていたのだが。
その所為かは知らないが、久々に老衰で死んだ。若いんだけど老衰て。

で、転生したわけなのだが。転生したのに世界が変化していない、というのも中々面白い経験だ。

「カリン」
「Ｙｅｓ，マスター」

転生して、６歳くらい。ある程度自分ひとりでの行動が可能になっ

た時点で、即座にカリンを呼び出した。
まだ幼い俺とカリンでは、流石にカリンのほうが年上に見える。うーん、頬を染めるなカリン。

早速“嘗て”の俺が用意しておいた資金の情報などを調べようとして、思わず何かに引っかかった。

首をかしげて、次いで己のステータスをチェックして、思わず頬が引きつるのがわかった。
鑑定眼によるスキル表示には表示されていないが、それでも俺にはわかる。
俺の魂が、若干ではあるが、今までに類を見ないほどに急激に変質しているのだ。

「……これは……。カリン、この状態でよく気付けたな」
「Ｙｅｓ，何せ、私はマスターとダイレクトに接続していますから」
「ふむ――原因はわかるか？」
「予想です。前回の魂がこの世界に来訪した事による影響かと」
「――おぉ」

成程、と理解する。

本来あるべきループとは、大十字九郎とマスターテリオン、両者が生まれた世界を飛び立ち、過去に近い平行宇宙を訪れる、と言うものだ。
大十字九郎と言う存在がループにより過去を訪れる事で、全く同じ魂が二つ存在する、という矛盾が発生する。
世界はこの矛盾を解消すべく、新たな大十字九郎の魂を若干変質させる。――より、魔の属性に高い親和性を持たせて。
ニャルラトテップはこの性質を利用し、人工的――いや、神造的に、

白き王を生み出そうとしている。

今回の俺の急激な成長。もしかして、このループによる変異が俺にも適用された――？

「……面白いじゃないか」

「Ｙｅｓ，私も、コレまでに無いほど快調です」

ニヤリ、と笑みを浮かべる。

これは、色々挑むチャンスだ――！！

０８　ホラーハント。

デモベ世界――というか、ニトロ世界はマジヤバイ。
なんというか、リョナまでは行かずともエログロというか、エロいのがグロいというか。
デモンベインという作中でもエログロは幾つか有った。
あの死の眠りに～云々といいつつ、ルルイエ異本だとかエンネアだとかライカだとかを触手でぬっちょり頂いてるタコ神。アレなんてエロ？　と言う話。
しかもグロいし。ＳＡＮ値削るし。

ごほん。何故そんな話に成っているかと言うと、今回面白い事例に巻き込まれてしまったからだ。

嘗て俺が見つけた新たなルール。
大十字九郎と大導師マスターテリオンの二人の最終決戦、ヨグ＝ソトースの門の中。其処を俺達が利用する事で、そのときの肉体を保持したまま、嘗ての世界へとループすることが出来る、と。

ただコレには幾つか問題点が存在し、ループして世界に落ちることが出来るのは、３つの時点に限られる。

一つ。　アル・アジフが舞い降りる７３０年代。
一つ。　デモンベインと大十字九郎が舞い降りる１８世紀中盤
一つ。　大導師マスターテリオンが召喚される、ズアウィアの滅びの瞬間。原作の大体２５年くらい前。

一つ目、二つ目はまだいい。

アル・アジフが落ちた時間など、まだまだ怪異がハバを効かせていた時代だ。
俺の個人的な意見としては、文明開化が途轍もなく待ち遠しかった、と言う点。せめて洋式便器をはやらせた俺は間違ってないと思う。

大十字九郎が落ちた時間は、とてもいい。
何せ原作の大体訳５０年前。この時間軸に落ちた場合は、次の己のための蓄えが容易に用意できて、その周の俺はスタートダッシュがとても決めやすい。日本も発展させられるし。
凄いのは、民間の経済力を強化し続け、結果政治よりも企業が力を持つ日帝が出来た、という話。アレにはマジでビビッた。経済力で世界を支配し始めた日本。続きがとても気に成ったが、残念ながら寿命でぽっくりといってしまった。

大導師のに引っ張られたときは本気で焦った。
何せレムリアインパクト炸裂のど真ん中だ。最近化物染みて強くなってきているとはいえ、レムリアインパクトの直撃は流石に死ぬ。
いや、本当なら出現「時」点だけで、場所までは引っ張られない筈なのだが。うーん。

あれ？話が逸れた。
いや、違う違う。問題は、アル・アジフの出現に引っ張られたときの話。

大昔に落された魔導書アル・アジフ。彼女はその直前の戦闘で魔力を使い果たし、死んだ魔導書としてとある人物――狂人と揶揄される男に拾われる。

そうしてその人物はアル・アジフを読み、狂気の中で類稀なる力を発揮し、一つの真実にたどり着く。
この世界こそ、邪神の箱庭である、と。警戒せよ、世界は彼の謀略により傀儡と化している、と。

そうして狂人は一冊の書籍を生み出す。
狂人の見たこの世の闇、外なる暴虐、外道の知識をただ一冊の書物へと。

その男、アブドゥル・アルハズラッドの生み出した魔導書こそ、後にこの世の重要な鍵として扱われる事と成る魔導書なのだが――。

また話が逸れた。
問題は、この時代が文明開化も無い未開の時代である、と言う点だ。
日本では藤原氏がまだ中臣氏だったり天皇が政治の中心だったりする時代だ。勿論武士（？）が現存してる時代だ。
そんな時代、流石に日本に渡るのも如何かとおもうし。
正直な話、元ではあるが現代っ子な俺だ。ここまで歴史が無さすぎるのも流石に辛い。
原作の時代でも結構一杯一杯だったのだ。１９世紀の日本とか、住みづらかった。
アーカムに移住してからは、覇道のお膝元と言うことも有って大分住みやすかったのだが。

で、如何しようかと考えたのもつかの間。この時代、まともな照明機器が存在せず、国と言う枠組みも何だかんだでかなり曖昧な時代。何が言いたいかと言うと闇が大きかった。

もう少し薄暗いだけで昼間から路上を闊歩する怪異に、死病として辺りを練り歩く怪異。
いや、巫撃というかホラーハンターというか、この時代にもそういう闇払いが存在しているし、最多勢力を誇る某宗教の神職も色々やっていた。まぁ、汚職のほうが酷かったが。
で、俺がやった事は簡単。フリーの悪魔祓いとしての活動を開始したのだ。

もう、来るわ来るわの依頼の数々。もういっそのことこの時代はデビ〇メイクライでも開いてやろうかと何度思ったことか。それほどの数の怪異が表れたのだからもう。
ただ、当然ながら問題も多数あった。と言うのが、某宗教だ。

此方はあちらの神を否定もせず、係わり合いに成る気は無い、と此方から明言してやったというのに、連中何を血迷ったか聖堂騎士（パラディン）を団体でこちらに嗾けてきた。まぁ、騎士といっても皮鎧で、製鉄技術も無い時代だけど。

流石に頭にきて、バルザイの偃月刀片手に大暴れしてやったのだが。凄いねこの時代。未来では殆ど現存していなかった信仰系の魔術を使ってきた。
神に対する祈りという一種の精神とリップにより、自らの精神力をブースとさせ、更に神の代行者を名乗る事により、控える信者の信仰＝魔力を自らにプラスしてブーストさせやがった。

地力としてかなり人間から逸脱している俺だが、流石にこういう類の人間を相手にするのは怖い。
ほら、言うじゃない。化物を殺すのは何時だって人間だ、って。

俺はまだ人間の心算だが、「幾ら自称しようが正真正銘化物だ」なんて言われるのは流石に傷つくし。
とりあえず連中を叩き潰して、姿を晦ましたわけですよ。
そうしてヨーロッパを歩き回っている最中。
漸く本題に戻るのだが、此処で見つけた小さな村。コレ幸いとその町を訪れた俺なのだが――。

「ふむ、悪魔へのイケニエねぇ」

訪れた村。そこは、妙に闇の気配の濃い村だった。
人々は妙に疲れた様子で、必死に生きているであろうにその村の影は妙に濃かった。

訪れた時間は遅かったものの、運よく宿を一室取ることに成功。
大分金はぼられたが、この時代だ。多少は仕方あるまい。
そうして訪れた宿で、宿の女将に尋ねたのだ。どうしてまた此処まで空気が暗いのか、と。

「それはね、またこの村の若い子供が、ヤルダバオトのイケニエにささげられたからさ」

曰く、この村は少し前までは、極普通の漁村であった。
然しある日を境に、徐々に村の海はアレ続けるようになった。
で、ある日突然ふらりと現れた男がこう言い放ったのだ。「この村

の海は呪われている」と。
実際、少し離れた海はそれほど荒れても居らず、この村の近隣の海だけが酷く荒れているのだ。
その男曰く、この海の嵐を抑えるには、ヤルダバオトにイケニエをささげ、その怒りを静めてもらうほか無い、と。

で、村では月に一人、村の子供を一人ずつ生贄に出す事になったのだ、と。

うーわー。また古典的な。
しかもヤルダバオトって偽神の名前だっけ？　なんとも適当な。もうちょっと名前凝れよと。

で、折角なのでその晩、こっそりとその村の生贄の祭壇なる場所に足を踏み入れたのだ。
ジメジメとした、いかにもクトゥルー系の祭壇らしい雰囲気を放つその場所。
闇の臭いの濃いほうへと脚を進めて、そうして見つけた一つの小さな祭壇。
どうやら其処は海底近くと繋がる地底湖らしく、祭壇の周囲を囲うように水が満たしていた。

で、問題はその祭壇の中心。
生贄と思しき少女が、四方八方を触手に囲まれ、ニュッチャニュッチャと卑猥な音を立てる触手に嬲られていたのだ。

《おっと詳細な描写はしないぜ。これ以上は検閲対象だ》

――何故か唐突に突っ込みを入れるべきだと、俺の全本能が叫んで

いるが、流石に此処でそれをすると奇襲をかけられない。
こっそりとある程度近付いて、バルザイの偃月刀を連続鍛造。宙に浮かべて投げ付けたそれは、見事に触手をバラバラに引き裂いた。

「ひ、ひいいいいい！！？？？　や、ヤルダバオトがあああ！！！？？？」

突如響き渡るヒステリックな叫び。何事かとそちらを見ると、其処に居たのはローブに身を纏った「いかにも」邪悪な魔導師のすがた。もう少し凝ってくれよ、と色々ゲンナリしつつ、この時代ではまだアレは流行の最先端なんだろう、と無理矢理自分を納得させて。

とりあえず、粘液まみれでレイプ目の少女を回収し、如何したものかと考えていると、カリンが擬人化して手早く少女に手当てをしてくれた。

「マスターに任せては、結局被害が大きくなるだけですし」
「チョイ待て。如何いう意味だこら」
「ペドフィリア」
「此方を指差すな！」

とりあえず、少女の事はカリンに任せて、バルザイの偃月刀一つ手に魔導師に向き直る。

「よう、連続幼児レイプ魔」
「ぐ、きさまあああああああ、私が神へといたる神性な儀式をおおおおおおおおお！！！！！！！！」
「あ、そういう手合いなわけ」

まぁ、佳くある話だ。

神に生贄をささげる事でその力を分け与えられ、最下級の神の力を得る、と言うもの。
まぁ、最下級とはいえ人間のレベルで図れば破格だからなぁ。

「はいはいわろすわろす」
「貴様あああああああああ！！！！！！！！！！！！！！」

そんな叫びと共に魔導師から放たれる青い波動。あー、水妖の気配が滅茶苦茶濃い。
クトゥルー系かと思ったら、少し違うのかな？

ぱしん、と音を立ててはじけ飛ぶ青い魔力の固まり。

「ぬあっ！？」
「俺に四属性は通じんよ」

どちらにしろ、何等かの属性系の魔術だったらしく、俺に届く前に加護の守りに弾き飛ばされてしまった。

因みに、この世界で最も多く出回り、ホラーハントに利用されているのが、儀式魔術。
何等かの武器を呪具に見立て、儀式と言う過程を通して怪異を払う物だ。例えば銀の弾丸やイブン・ガズイの霊薬を用いた兵装などがコレに該当する。
利点としては少ない魔力でも運用が出来る点。不利点は消耗品であるため戦闘継続に限りがある事か。

次に多いのが、属性魔術。俗に言う精霊魔術とは少し違うのだが、大体似ている。
これは自らの魔力を用いてマナを集め、集めたマナを属性変換――

つまり既存の法則に存在する攻撃的なエネルギーとして利用する、と言うものだ。
魔力はエネルギーではあるが、物理干渉が難しい。そこで、魔力を既存のエネルギーないし現象に変換することで、わかりやすい“威力”として扱う事が出来るのだ。

今回の相手、件の魔導師の扱う物は、どうやらこの俗世威魔術だったらしく、物理的干渉といえど属性に縛られている限りは俺に技が届くことはありえない。

「さて、それじゃ、お前は早々に滅びろ」
「な、何故邪魔をするうううううう！！！！！　貴様も魔術師ならばわかるだろう！！　これさえなせれば、俺は至高の存在に至れる！！　その娘を最後の生贄にささげる事で！！」
「理屈は理解できる。──が、興味が無い。第一俺が気に食わない。以上、抗弁終了」
「きざまあああああああああああああああ！！！！！！！！」

さてと呟いて、右手にバルザイの偃月刀を鍛造する。
これこそが魔術、魔導師として目指すべき場所。あるべき世界を捻じ曲げ、己の望む世界をその上に描き塗りつぶす。外道の知識を用いた“魔”の術。

此処には何も無い。いや、無かった。が、事実としてバルザイの偃月刀は此処にある。
いまこの瞬間、バルザイの偃月刀は此処にあった事に成ったのだ。

「炎熱術式添付──炎に抱かれ眠れよ邪悪！！」
「おのおおおおおおれええええええええええええええええええ！

！！！！！！！」

何処の銀河南無だよ、等とおもいつつ。魔導師は此方の放った“燃やす”という概念の炎に焼かれ、徐々にその姿を失い――

「――――ａａａ――――――――Ｉａａａａ――――――――ＩＡ！　Ｉａ！　Ｂａｓａｔａｎｎｎｎｎｎｎｎｎｎｎんんんんんんんんんん！！！！！！！！！！」

「な、しまっ――！！

咄嗟にその場を飛び退き、カリンと少女を回収してもう一歩飛び退く。

祭壇を中心とした円形の湖を囲うように、更に巨大な魔法陣が浮かび上がる。

「ちょ、これは！？」

「神の召喚術式――但し魔力の不足による一部召喚かと」

「それでも十分脅威だ！！」

見れば件の魔導師は、先ほど放った炎により完全に消滅したらしかった。――くそ、最悪な置き土産だ。

「逃げるぞカリン」

「了解」

即座にカリンを身に纏い、マギウススタイルへと姿を変え、ページの翼を用いて洞窟の中を滑空する。

大慌てで洞窟を抜け出したその背後。近寄る触手を咄嗟に鍛造した偃月刀で叩ききって――。

「ち、何だよコイツは！！」
「バサタン、と呼ばれていたようですが、詳細不明！」
それは、今まで見たことの無いタイプのグロい触手だった。内蔵の継ぎ接ぎで出来たような触手に、蟹の甲羅のような装甲が所々に見えている。
アレで殴られれば相当痛いだろう、等と考えつつ、アレを吹き飛ばすにはこの状態では不利と判断。
「カリン、やるぞ」
「了解！」
頷きあって、魔力を高める。滅ぼす力が足りないならば、滅ぼす力を呼び出せば良い。
「――機神召喚！！」
天に浮き上がる魔法陣と、其処から呼び出される一機の赤い機体。全長６０メートルもありそうなその機体。クラースナヤ。腕を組んで現れたその機体は、伏せた目を突如その触手へ向けてギロリとにらみつけた。
即座にクラースナヤへ乗り込み、機内から触手を睨みつける。少女はとりあえず機内に運び込んだのだが――どうも、あの触手はこの少女を狙っているらしく、此方に向けてその触手を徐々に伸ばしていた。
「自らにささげられた供物を求めているのかと推定」
「ふん、悪食め」
右手に表すのは、何時も使い慣れたカリンの記述“魔導師の杖”だ。

「一気に焼き払う！！　呪文螺旋（スペル・ヘリクス）！！」
「いあ・くとぅぐあ！！」
螺旋状に放たれる字祷子術式。二つの螺旋は絡み合い、その中央に無限の熱量を生み出していく。
「――神獣形態！！」
轟音と共に放たれる白い光。獣の咆哮にも感じられたソレは、問答無用で触手を焼き飛ばすと、そのまま洞窟のあったであろう地形へと直撃し、その埠頭の在った場所を消し飛ばし、海底に小さなクレーターをあけていった。

「ベネベネ。清掃完了」
『埠頭ごと消飛ばすとは。まさにダイナミック清掃』
「ハハハハ、こやつめ」
久々に全力を出した所為か、少しテンションが高い。
何せ今まで、まともに大技を出せるような展開が無かったからなぁ。クラースナヤを扱うようになってからは、本編中では破壊ロボを使っていたし、それ以外の場面ではクラースナヤを必要とする程火力を求めもしなかったし。
「――ウゥッ」
「っと、そうそう忘れてた」

コックピットの中に響くその声。先ほど助けた祭壇にささげられていた生贄の少女。
慌ててクラースナヤを地上に降ろし、少女を抱えて地上へ降りる。

「カリン、問題は？」
「ありません。強いて言うなら、この子は才能が有りそうです」
「才能？」

言われて、改めて少女に視線を向ける。但し、今度はただ見るだけではなく、確りと根性を入れて。

「――成程」

薄らと香る闇の気配。オカルトという分野において、この上なく好まれる資質。
成程成程。あの魔導師がこの少女を最後の生贄にと望んだのも理解できる。
この少女の持つ闇の素質、言ってしまえばC計画における“月の子”にこそ及ばないが、一般的な魔導師のソレと比べても、なんら遜色のないほどの物を持っているように感じる。

「これは――事情を説明して、アーカム送りだな」
「はい。――田舎漁村哀れ」
「だな。どちらにしろ村の若い子は居なくなるわけだし」

とりあえず俺がすべきは、この子に対する事情説明、この子を村につれて帰る、村の人間に事情説明、この子をアーカムへと連れて行く、と。そんなところだろう。

「やったから、といって大局が変化するわけでもありませんが――」
「それでも、やらぬ善よりやる偽善、ってね」
「Ｙｅｓ，Ｍａｓｔｅｒ」
苦笑するようににこりと笑ったカリン。
そんなカリンを引き連れて、回収した少女を背負い、とりあえず村へと向かうのだった。

08　ホラーハント。（後書き）

序盤の解釈は、確かこんなのが有った様な希ガス。
ＰＳ２版はセーブデータ紛失、ノベライズ版はモノが紛失。うむぅ……。

09　魔術的錬金術と見えてきた終わり

佳く解らない周目。

今回は色々錬金術の造詣を深めるべく、色々な実験を行う周とした。
もう、これがとても面白い。
この世界の錬金術のレベルはそう高いといえるほどの物でもなかったのだが、どうやら俺と相性がよかったらしく、気付けば手合わせ練成とか出来るようになっていた。作品が違う。

先ず、錬金術と言うのは、物質の形を操る、と言う技術ではない。
錬金術と言うのは、無から金を生み出し、不老不死を求めるという事を主題とした技術だ。

で、手合わせ錬金――まぁ、鋼な錬金術師の話。
アレの手合わせ錬金とはつまり、合わせた手と言うものを術円と過程し、その中で循環させた術理を手を当てる事により添付／起動させる、と言うものだ。
世界観が大分違う上、真理なるものに触っても居ない俺にそれが可能かと言うと――少し手間取ったが、なんとかこれを成立させることに成功した。

というのも、先ず手を合わせる、と言う工程。此処に目を付けた。
手を合わせるという事は、円を描くという事。此処に俺は、更に呪術的な意味合いを持たせるべく、何時ぞやアヌスと共同研究してい

た略式儀式魔術を応用してみたのだ。
手を合わせるという行為に、術理の円環という意味に加え、精神統一を初めとする各種呪術的ブースト作用をはじめとした色々を添付。モーションと結果さえ同じなら、過程に関する術理はべつに如何在ろうと問題あるまい。
そうして組み上げた術理を用いて、物質の素材構成／高質を変質させるという現象に成功したのだ。

まぁ、真理なるものは佳くわからないが、ある意味俺は生と死を何度も体験しているわけで。ある意味での極地の一つを何度も経験している所為か、感覚的には理解できているのだ、ソレも。

そうして錬金術を儀式化し、マニュアル化した辺りで今周の終わりが来た。
何となく最近破壊ロボの活躍頻度が減ってきたなー、と思っていたら、いつの間にか平然とデウスマキナが暴れまわる都市アーカム。そうこうしている内に夢幻心母が浮き上がり、大いなるCことクトゥルーさんの劣化版が召喚された。

いや、ほら。怪物版と直接顔を合わせてると――あの程度ではねぇ。一般人が直視しても、ＳＡＮ値が若干削られる程度まで劣化したクトゥルーなんぞ見る影もない。

「いえ、普通は劣化版でも直視すれば狂気に捕らわれます」
「えええ、あの程度で？」
「はい。マスターはチートですから」

下手糞な顕現をさせられたクトゥルー御大を眺めていると、何かカリンにチート認定を受けた。
うわぁ、ちょっと嬉しい。

あの、歴史的知識しか持ち合わせていなかった頃。未だ俺がただただ転生を繰り返すただの人間だった頃から考えると、確かに今の俺はチートといって差し支えない。

「駄菓子菓子！　コレは覚えておいてくれ。俺のチートは長い時間を掛けて研鑽したもので、決してぽっとでの胡散臭い神様から貰ったチートではない！！」

「若干補正はあるみたいですけど？」

「それはアレだ。ご都合主義の神様ってヤツじゃないの」

ゲーム・マスターに対する免責権。ゲームに携わりながら、ゲームマスターからの直接的干渉の一切を無効化するなんていうチートスキル。

他の世界観の大半では無意味なスキルだが、このデモベ世界ではまさしくこの上ないチートスキルだ。

まぁ、俺が此処までの研鑽を積めたのも、有る意味このスキルのおかげかもしれない。

「第一、此処まで鍛えても、白の王にも黒の王にも届かないってのはねぇ」

「物語のバックアップを受けている存在に、正面から挑んで勝てる筈も無いかと」

直接彼等に挑んだわけではない。ただ、俺の頭の中、カリンの超演算を用いて、彼等との戦闘をシミュレートしてみたのだ。

そうするともう、ねぇ。

黒の王は未だいい。ある程度まともに戦ってくれるから。ただ、時間が長引くとニャルさんに勘付かれて時間を変動させられて戦闘中断、という結果が大半で、黒の王を倒すまでは絶対に行かない。まぁ、それはいい。この世界のシステムに挑んでいるようなものだ。

勝てないのは悔しいにしても仕方が無い。諦めはしないが。

ただ、問題は白の王だ。アレは寧ろ積極的に挫折を経験して成長を促す為、ニャルさんは早々簡単に力を貸したりはしない。

だというのに。だというのにだ！！　何で俺の妄想なエミュレートの中出まで、早々ご都合主義ばっかり起こるんだよ！！　意味不明だよ！！

何だよデモンベインを倒したと思ったらみんなの祈りが力となってパワーアップ再生！？　何処のグリッターだよ！！　俺ぁガタノトーアか！　石化スンのかァアン！？

倒しても倒しても無限に復活し続けるデモンベイン（妄想）。当に無限ループなその妄想に、妄想の主である俺が思わず悲鳴を上げてシミュレートを中断したほどだ。

本当、あいつ等二組はマジチートだ。んで、その仕掛け人のニャルさんは鬼だ。

「――マスター」

「ん。ドクターが覇道に亡命したな」

こっそり破壊ロボの一部を駆逐しながら観測していた現状。うんうん、物語はちゃんと進行しているみたいだねぇ。

まぁ、俺の目的の為には、この物語を成立させる必要がある。つまり、ニャルさんと目的は被っているのだ。

今のところ邪魔をする心算も無いし、向うに過干渉する心算も無いのだが。

なんて事を考えながら数日。

いつの間にか死んでいたアル・アジフが復活し、何だかんだで逆十

時を叩き潰し、転移するクトゥルーを追って件のポイントへ向けて走り出した。

然し、最近大十字の魔導師としての錬度が上がってきている気がする。

いや、今周に限っての話ではなく、基礎的な部分の霊的強度が、マスターテリオン並みにまで。

未だトラペゾヘドロンこそ使っては居ないが、それでもアンチクロスとの一対一なら、苦戦しつつもなんとか下せる程度にはなってきている。

これは、もしかしたら終わりが近いのかも。

振り返れば、長かったような短かったような。

――いや、長かった。うん。長かった。

一応俺の人生はイベントマップを記載して、場合にもよるが、ルートごとに要救済対象毎の救済プランが設計されている。

この救済プランは主人格が休眠している間に、ルート毎の人格が設計した物だから、後々データを煮詰め直さにゃならんのだけど。まぁ、応用は効くし。

「ま、成るようになるっしょ」

「です」

海面に沸き立つ石柱群。不出来な機械と肉の塊を生贄に捧げる祭壇と、それを対価に現れようとする巨大な外なる神。

その姿を、カリンと二人上空から眺めながら、近付いてきた終わりの予感に言葉を漏らしたのだった。

10　終わりの始まり

「やぁやぁ。漸く見つけたよ。君たちだね、ボクの作った箱庭で勝手に遊んでいたのは」

それは突如、空間から滲み出すように、沸き立つ泡のようにして現れた。

見た目はスーツに実を纏ったキャリアウーマンの様で居て／その凶悪なる炎の三目は見る物全てを呪い愛する魔王の姿であった。

「よう、初にお目にかかるよ、混沌」

「――リアル（胸が）膨れ女」

「あははっ、この姿は九郎クンが喜ぶかなぁ、と思って取ってるんだよね」

そういって手を口に当てて笑う混沌。

厭違う。その姿形こそ笑って見せているが、その実は此方を興味深そうに観察していた。

「ふむ、何時気付いた？」

「さて、何時だったか。数億周前くらいだったかな。面白い存在がいて、折角だから物語に正式に組み込もうかな、なんて思ったのに、不思議な事にボクの意図／糸を意にも介せず自由に振舞う存在が居る、って気付いたのは」

「――ドクターの件か」

ドクター……ドクター・ウェスト。

彼の元で学んだ事は、間違いなく昨今の俺の糧となっている。

今の俺を形作る上で、彼の元で学んだ事はとても重要な部分だろう。
だがしかし、彼は原作キャラ。物語の重要なキーパーソンだ。普段はとてもそう思えないが。
悪では有れど、唾棄すべき邪悪でもない彼等。欲する物を求めて必死に足掻く彼は、ある意味最も尊敬すべき“人間”なのかも知れない。
しかし、彼に接触した事で、ナイアルラトホテップに勘付かれてしまったという点を鑑みれば――いや。
彼の元について、目立ちすぎた。俺の責任、か。

「んじゃ、どうして此処が解った？」
「簡単なことさ。キミは最後に白の王と黒の王の道を使い、次へと移動していた。だからこそ、此処で網を張っていたのさ」

予想以上に時間は掛かったけどね、と混沌。
成程。――過去転移ルート、次の周のスタートが楽に成るからと使いすぎたか。

そう、此処は門の中。門にして鍵たる神、ヨグ＝ソトースの回廊の一角だ。
遠目に見えるのは魔を絶つ剣とリベル・レギス。
その戦いは若干デモンベイン不利で進んでいる。これは――駄目だな。

戦いはまだまだ続く。物語の終わりはまだまだ先が長そうだ。

「それで、俺に何の用だ、混沌」
「またまた、解ってるんだろう？」
「言葉による意思疎通は、人の重要なコミュニケーションツールだ。

その姿をしているなら、ちゃんと言葉を使え」
「おやおや、中々厳しいねキミは。まぁいいさ。用件は単純に、退去勧告だ」
そう言ってニヤニヤと笑う混沌。ああ、俺にコイツを殺し切るだけの力が在ればなぁ。
「当然ながら、断る」
「だよねぇ。ま、そうなれば当然力尽く、って事に成るんだよね」
にこりと、ゾワリと。
まるで花が咲くように／沸き立つ死臭のように微笑む／微嗤む〔邪神〕。
虹色にして無色の狭間を染め上げる漆黒の混沌。
全てであるが故に何者でもない怪物が、此方に向けてワラッていた。
「は、大人しく倒されるほど俺は大人しくも無いぞ、混沌」
「どこぞの魔導師ではないですが、踏み潰すぞ、邪神」
「ハ、ハハ、ハハハハハ！！　懐かしいなぁ、彼を持ち出すなんて。ああ、懐かしいな。まさか人にして魔導に身を落とした『だけ』の分際で、ボクの黒き王を千日手にまで持ち込んだんだから。けど、まさかあれを観測して記憶していられるなんてね」
フンと鼻を鳴らしておく。ち、カリンには後でオシオキだな。敵に余計な情報を渡す必要は欠片も無いんだけど。
――まぁ、いいか。
「来い、クラースナヤ」

呟くと共に現れる深紅のデウス・マキナ。
何者でもないが故に此処にある深紅のそれ。
その内側に収まると共に、普段は押さえ込んでいる力を稼動させる。

「ほほぅ、コレは中々。中級神（ダゴン）くらいの力は在るんじゃないかい？」
「ふん、催しはまだ始まったばかりだぞ」「精々愉しめ、邪神」

言いつつ、右手に籠めるのはクトゥグアの魔力。
無作為に放つのではなく、只一点に凝縮する事で、その拳が持つのは無限の熱量へと変化する。
レムリアインパクトの極点、圧縮消滅するその直前の熱量にも等しいほどのそれ。それをむき出しのまま、邪神へ向けて殴りつけた。

ニャルラトホテップはといえば、それを余裕の笑みを浮かべて片手で受け止め――ようとして、思い切り叩き飛ばされていた。

このチャンスを十全に生かすべしと、即座に魔導師の杖を召喚。

「スペル・ヘリクス！！」

――大地はその偉大なる懐を母とする。
――大海はその広大なる海原に命を抱き。
――生まれ出でた風は空を走り。
――炎によりて世界は廻る。

「四門神獣形態っ！！」

土、水、風、炎、其々のエレメンタルを調和する形で配置し、“杖”により撃ち出す。
純粋な西洋魔術では相克しか起こさないコレを、東洋思想をもって

制御する。
己が一撃必殺、命の審判。
最初の一撃で思わずか自らの本性をあらわにしていたナイアルラトホテップは、迫り来るその一撃をなんとか受け止め、然し受け止めきれずに咄嗟に身をかわすことでその直撃を防いで見せた。
『ば、ばかな！？　たかが人間がこのボクに傷を付けただとっ！？
いや、それよりも何故人の攻撃がボクに通じる！？』
「ざまぁ見晒せ！！」
「貴様はそうやって上から見下していろ。その間にお前は滅ぼす」
俺には物語の力なんて無い。
世界のバックアップなんて物も無い。
在るのはただ無限に繰り返される時間と、最高にして最愛の我が相棒。
そして俺にあるのは、只我武者羅にぶつかるという選択。
「コレで解ったとは思うが、此方にはお前を滅ぼし得る力が在る」
「そして、喧嘩を売られて無傷で返すほど易しくも無い」
『ば、馬鹿な。ルルイエやシュブ＝ニグラに、それにこれはハスターとクトゥルーの魔力！？　なんであの2柱が一人の人間に、しかも同時に力を貸す！？』
力を籠めて、混沌を睨みつける。
流石の俺も、此処であの邪神を滅ぼしきれるとは考えていない。出来て精々力の半分を削ぐくらいだろう。

「あまり人間（ヒト）を無礼（ナメ）るなよ、混沌」
「言ってみたかったんですね解ります」

でも、それで十分だ。俺がこの世界に与えた影響と、俺が削れる邪心の影響は大体同等。
ならば、俺の成すべき事は只一つ。

「行くぞカリン」「ハイマスター！」

俺、カリン、クラースナヤ。今此処には揃いうる限り最高の三位一体がある。
今の俺達に、勝てない存在なんて在る筈が無い。

――カチリと、頭の奥で、その瞬間何かが繋がった。
瞬間、理解した。成程、これが俺の本当のチートか、と。
そうして同時に理解する。コレが原因でループしていたのか、と。

『なっ、馬鹿な！？　何だその力は！？　ボクの知らない力！？
――いや、違う、ボクはそれを知っているぞ！！　けれど、そんな、まさか――――穴か！？』

高まる余りの力の顕現。波打つそれは、俺／カリン／クラースナヤの境界を曖昧に――否、本当の意味での三位一体をその場に顕現させて居た。

『そんな、馬鹿な！？　なんでこの、僕の管理するクラインの壺の中で、よりにもよって『穴』だとっ！！？？　人類の極地、此処ではない何処か、無限にして零！！　たどり着いたというのか、よりにもよってこのクラインの壺の中で、僕の生み出した箱庭で！？』

「誰が言ったか、この世は全て胡蝶の夢。貴様の敷いた悪夢の庭であれど、其処に生きるのは今日を生きる人々。為らば其処には希望の夢が響くは必然」
「其処に命の唄が響く限り、私たちに終わりは無い」

そのまま驚く混沌に、クラースナヤの右手の一撃を叩き込む。
混沌は咄嗟にそれを片手で受け止めようとするのだが――ガツン、といい音と共に混沌の化身は勢い佳く吹っ飛んだ。

『な、何故！？　たかが神の影風情が！？』
「ブァーカ！！　これを只の神の影（デウスマキナ）と同一視してるんじゃねぇよ！」

何せこの機体――というか俺は、旧支配者らから直接祝福やらを受け、それを取り込み進んだ俺の影だ。つまり、幾柱もの神の影と言葉を重ねて顕現しているこの機体は、下手な神よりも格上であり、同時にコイツは俺の写し身。例え神様だろうと消せはしない。

――で、あえてわざとらしく盛大に格好つけて混沌を見下してやった。

「要するに、イレギュラーザマァｗｗｗ」
「邪神――ＮＤＫ（ねぇどんなきもち）？ｗｗｗ」

『――ふ、ふふふ、あはははは！！　まさか、真逆（まさか）真逆（まさか）、こんな展開になるなんて』

頭痛を堪えるような、そんな姿が幻視出来そうな混沌の声。
ふふふ、流石の混沌といえど、この超展開に精神的ダメージは隠しきれまい。

混沌に精神攻撃は意味があるのかって？　んな事趣味以上の意味は無い。

「さぁ、騙り逢おうか、混沌――主に暴力言語で！」
「ＳＡＮ値直葬してやんよ！」
『じゃ、ボクはあえてこう言おう――こんなの絶対おかしいよ！！』

そうして、時空の片隅、ここではない何処かで。
方や黒き混沌が名伏し難き叫び声を上げ。
方や赤き喜劇の紡ぎ手が咆哮を上げた。

この死すら死せる時の狭間、その戦いが何時まで続くのかは、両雄そのどちらにも知れた事ではなかった。

１０　終わりの始まり（後書き）

実は最後のコレをやりたいがために書き始めたこの過去編。
ナイアさんにコレを言わせたいだけだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6783y/

クライン・ループ

2012年1月13日15時45分発行